埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書　第282集

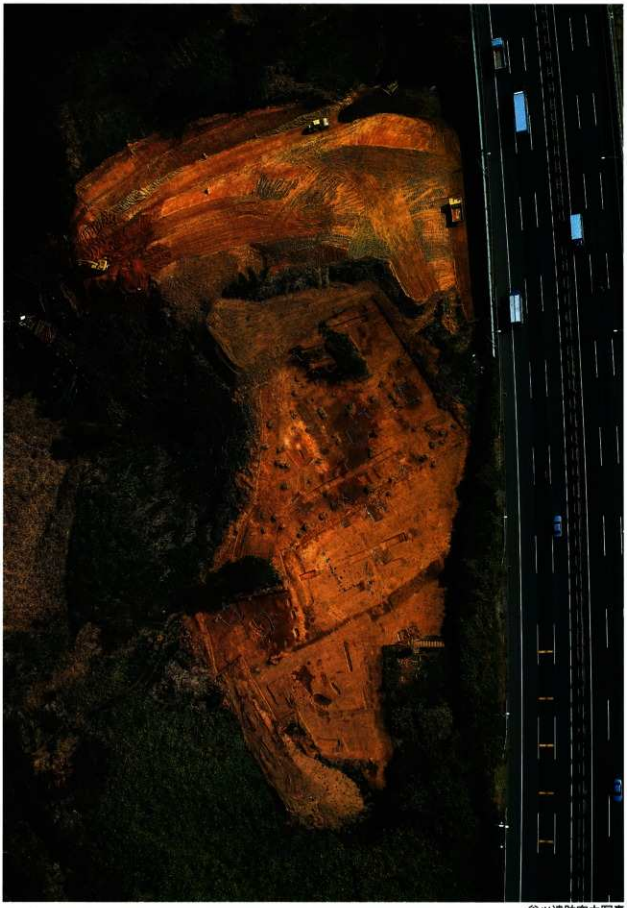
比企郡嵐山町

谷ツ遺跡

関越自動車道小川嵐山インターチェンジ建設事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告

2002

日本道路公団東京建設局
嵐　山　町
財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団



谷ツ遺跡空中写真

発刊に寄せて

嵐山町は、比企丘陵の中核にあって、郷土埼玉を代表する歴史上の人物として有名な木曽義仲や畠山重忠のゆかりの地として知られ、縄文時代から中・近世に至るまで多くの史跡と文化財を擁する歴史の町であります。そこで、町では貴重な文化遺産を積極的に活用した「歴史の町づくり」を推進してまいりました。

この度、関越自動車道小川嵐山インターチェンジの建設とともに、それと併行して町道の新設を行うこととなりました。このインターチェンジの建設により、産業、物流、文化の拠点として、本町をはじめとする比企地域の活性化に大きく貢献するものと期待しております。

さて、この関越自動車道小川嵐山インターチェンジおよび町道の建設予定地には谷ツ遺跡があり、工事に先立って発掘調査が実施され、貴重な成果を得ることができました。

今回報告いたします谷ツ遺跡では、縄文時代と奈良・平安時代の集落が発見され、人びとの生活の様子を垣間見ることができます。また、中世の城跡にかかわる堀跡も発見されるなど、武士の活躍に思いを馳せることができます。

発掘調査の成果をまとめたこの報告書が、地域の歴史解明の一助となり、埋蔵文化財の保護のための資料として、また学術研究の基礎資料として資するところがあれば幸いに存じます。

終わりに、事業の実施にあたり深い御理解と御協力をいただきました関係の皆様方に対し、心から感謝を申し上げます。

平成14年9月

嵐山町長　関　根　昭　二

序

埼玉県の西北部に位置する比企丘陵の小高い山々には、かつてくりひろげられた歴史の足跡が多くのこされています。縄文人は、実り豊かな比企の森と谷を生活の場となし、弥生時代のはじまりは、農耕にともなう開発の幕開けでもありました。やがて地域権力の成立を物語る数多くの古墳が、この地にも築かれました。

古代には須恵器の生産をささえる人びとが暮らしていました。中世には武士が登場し、鎌倉幕府の成立に郷土武士たちが大きく貢献しました。群雄割拠の戦国時代にこの地が歴史の舞台として登場することは、有名な史実として現在も語り継がれています。

今日、武士たちがかけめぐった山野には高速道路が開通し、森や丘は緑豊かな自然にいだかれた工業団地や大住宅地に生まれかわりました。時代はうつりかわっても、この地が産業・文化・流通の発展にふたたび大きく貢献していることは、時代をこえてくりかえされる歴史のおもしろさともいえましょう。

このたび、県の施策であります「県内１時間道路網構想」のもとに、小川・嵐山地区を走る関越自動車道にインターチェンジと町道が新設されることになりました。これらの建設予定地内には遺跡の存在が確認されました。遺跡の取り扱いについては、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が各関係機関と慎重に協議を重ねた結果、やむを得ず記録保存の措置を講ずることとなり、当事業団が日本道路公団と嵐山町の委託をうけ、発掘調査を実施することになりました。

その結果、縄文時代と奈良・平安時代の集落、および中世城跡にかかわる堀跡が発見されました。その成果をまとめたものが本書であります。本書が埋蔵文化財の保護、教育普及、学術研究の資料として広く活用していただければ幸いであります。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、日本道路公団東京建設局さいたま工事事務所、嵐山町、嵐山町教育委員会、ならびに地元関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成14年９月

財団法人　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長　桐川卓雄

例言

1．本書は、埼玉県比企郡嵐山町大字杉山地内に所在する谷ツ遺跡の発掘調査報告書である。

2．遺跡の略号と代表地番、および発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。
谷ツ遺跡（ＹＴ）
埼玉県比企郡嵐山町大字杉山151－１他
平成13年8月8日付け教文第２－49号

3．発掘調査は、関越自動車道小川嵐山インターチェンジ建設にともなう事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、日本道路公団東京建設局さいたま工事事務所の委託をうけ、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。

4．本事業は、第Ⅰ章の組織により実施した。

5．発掘調査は、君島勝秀と上野真由美が担当し、平成13年８月１日から11月30日まで実施した。

6．整理・報告書作成作業は、平成14年４月８日から９月30日まで実施した。

7．遺跡の基準点測量は、精進測量設計株式会社に委託した。

8．航空写真測量は、精進測量設計株式会社に委託した。

9．発掘調査時の写真撮影は、君島、上野、末次雄一郎が、遺物の写真撮影は、石器を高田賢治が、その他を大屋道則が行なった。

10．出土品の整理および実測、図版の作成は、須恵器・土師器を成田友紀子が、石器を高田が、その他の遺物を君島が行なった。

11．本書の執筆は、Ⅰ－１を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が、Ⅳ－１の石器を高田が、Ⅴ－２を成田が、Ⅴ－３を田中広明が、Ⅴ－４を県立歴史資料館館長の梅沢太久夫氏が、他を君島が行なった。

12．本書の編集は、君島が担当した。

13．本書にかかる資料は平成14年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが保管する。

14．本書の作成にあたり、以下の機関・諸氏から御教示、御協力をいただいた。記して謝意を表します。
（敬称略）
小川町教育委員会、県立歴史資料館、嵐山町インター対策課、嵐山町教育委員会、梅沢太久夫、村上伸二、吉田義和

凡 例

1．本書挿図中におけるX，Yの座標数値は、国土標準平面直角座標Ⅸ系（原点北緯36度00分00秒、東経139度50分00秒）にもとづく座標値をしめしている。各挿図の方位は、すべて座標北をあらわす。

2．遺跡におけるグリッドの設置は、国家標準平面直角座標にもとづいて設置しており、10m×10mの方眼である。グリッド名称は、北西杭を基準として東西方向西から東へアラビア数字順、南北方向北から南へアルファベット順に番号をつけている。

3．挿図の縮尺は各図版中に指示した。

［遺構］住居跡・土壙1／60
カマド微細図1／30
掘立柱建物跡・ピット1／80

［遺物］縄文土器1／3
須恵器・土師器実測図1／4
須恵器拓本1／3または1／4
石器実測図1／3
鉄器実測図1／3

4．遺構の略号は以下のとおりである。
ＳＪ…住居跡　ＳＢ…掘立柱建物跡
ＳＫ…土壙　ＳＤ…溝跡　Ｐ…ピット

5．須恵器実測図の底部下に派生する線は、削りの位置をしめしており、線と線の間は削りを施している範囲をあらわす。

6．須恵器と土師器の断面については、青灰色の明瞭な須恵器のみ断面を黒く塗りつぶした。ロクロ成形土師器、土師質須恵器、酸化炎焼成須恵器などは、断面を塗りつぶしていない。

7．遺構断面図に表記した水準の数値は、海抜高度であり、単位はmである。

8．遺物観察表の凡例は以下のとおりである。
・土器の種別については以下のようにしめした。
Ｓ－須恵器　Ｈ－土師器　ＨＳ－土師質須恵器　Ｋ－灰釉陶器
・口径、器高、底径はcmを単位とし、（　）内の数値は推定値である。器高の（　）は残存高をしめす。
・胎土は肉眼で観察できる含有物を以下のようにしめした。
Ａ－白色粒　Ｂ－角閃石　Ｃ－石英・長石
Ｄ－雲母　Ｅ－赤色粒・鉄分　Ｆ－小礫・砂礫　Ｇ－黒色粒　Ｈ－白色針状物質　Ｉ－片岩
・焼成は良好、普通、不良の三段階にわけた。
・色調は『新版標準土色帳』(農林省農林水産技術会議事務局監修1967)にてらして、近似した色相をしめした。
・残存率は図示した器形に対して5％単位でしめし、15％以下は破片とした。

9．本書に使用した地図は、建設省国土地理院発行の1／25,000地形図「武蔵小川」「三ヶ尻」を、また、嵐山町発行の1／2,500を使用した。

目　次

発刊に寄せて
序
例言
凡例
目次

Ⅰ　発掘調査の概要 …… 1
　1．発掘調査に至るまでの経過 …… 1
　2．発掘調査・報告書作成の経過 …… 2
　3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織 …… 3
Ⅱ　遺跡の立地と環境 …… 4
Ⅲ　遺跡の概要 …… 10
Ⅳ　発見された遺構と遺物 …… 17
　1．縄文時代 …… 17
　　(1)　住居跡 …… 17
　　(2)　ピット群 …… 20
　　(3)　遺構外出土遺物 …… 20
　2．奈良・平安時代 …… 31
　　(1)　住居跡 …… 31
　　(2)　掘立柱建物跡 …… 61
　　(3)　土壙 …… 61
　　(4)　遺構外出土遺物 …… 61
　3．中世 …… 65
　　(1)　土壙 …… 65
　　(2)　溝跡 …… 65
　　(3)　遺構外出土遺物 …… 65
　4．その他の遺構 …… 67
　　(1)　土壙 …… 67
　　(2)　溝跡 …… 68
　　(3)　ピット・炉跡 …… 69
Ⅴ　発掘の成果と諸課題 …… 71
　1．各時代の遺構について …… 71
　2．谷ツ遺跡と粕川流域の集落変遷について …… 80
　3．谷ツ遺跡出土土器の組成について …… 91
　4．谷ツ遺跡の城郭遺構について …… 98

挿図目次

第1図　埼玉の地形 …… 4
第2図　遺跡分布図 …… 5
第3図　谷ツ遺跡位置図（1） …… 6
第4図　谷ツ遺跡位置図（2） …… 11
第5図　谷ツ遺跡グリッド網図 …… 13
第6図　谷ツ遺跡西区全体図 …… 14・15
第7図　谷ツ遺跡東区全体図 …… 16
第8図　第2・3号住居跡 …… 18
第9図　第2号住居跡出土遺物 …… 19
第10図　第29号住居跡 …… 19
第11図　第29号住居跡遺物分布図 …… 20
第12図　第29号住居跡出土遺物 …… 21
第13図　B－17グリッドピット群 …… 22
第14図　B－17グリッドピット群出土遺物 …… 22
第15図　遺構外出土遺物（縄文時代）（1） …… 23
第16図　遺構外出土遺物（縄文時代）（2） …… 24
第17図　遺構外出土遺物（縄文時代）（3） …… 25
第18図　遺構外出土遺物（縄文時代）（4） …… 26
第19図　遺構外出土遺物（縄文時代）（5） …… 27
第20図　遺構外出土遺物（縄文時代）（6） …… 28
第21図　第1・9号住居跡 …… 31
第22図　第1号住居跡遺物分布図 …… 31

第23図　第１号住居跡出土遺物 …… 32
第24図　第４・34号住居跡 …… 34
第25図　第４号住居跡出土遺物 …… 34
第26図　第５・７号住居跡 …… 35
第27図　第５号住居跡出土遺物 …… 35
第28図　第６号住居跡 …… 36
第29図　第６号住居跡遺物分布図 …… 37
第30図　第６号住居跡出土遺物 …… 37
第31図　第８号住居跡 …… 38
第32図　第８号住居跡出土遺物 …… 38
第33図　第10・22・23号住居跡 …… 39
第34図　第10号住居跡出土遺物 …… 40
第35図　第11号住居跡 …… 41
第36図　第12号住居跡 …… 41
第37図　第12号住居跡出土遺物 …… 42
第38図　第13号住居跡 …… 42
第39図　第14号住居跡 …… 43
第40図　第14号住居跡出土遺物 …… 43
第41図　第15号住居跡 …… 44
第42図　第15号住居跡出土遺物 …… 44
第43図　第16号住居跡 …… 44
第44図　第17号住居跡 …… 45
第45図　第17号住居跡出土遺物（1） …… 46
第46図　第17号住居跡出土遺物（2） …… 47
第47図　第18号住居跡 …… 48
第48図　第18号住居跡掘り方 …… 49
第49図　第18号住居跡出土遺物 …… 49
第50図　第19号住居跡 …… 50
第51図　第19号住居跡出土遺物 …… 51
第52図　第20号住居跡 …… 52
第53図　第21号住居跡 …… 52
第54図　第21号住居跡出土遺物 …… 52
第55図　第24号住居跡 …… 53
第56図　第24号住居跡出土遺物 …… 54
第57図　第25号住居跡 …… 55
第58図　第25号住居跡出土遺物 …… 55
第59図　第26号住居跡 …… 56
第60図　第27号住居跡 …… 56
第61図　第27号住居跡出土遺物 …… 57
第62図　第28号住居跡 …… 57
第63図　第30号住居跡 …… 58
第64図　第30号住居跡出土遺物 …… 58
第65図　第31号住居跡 …… 59
第66図　第31号住居跡出土遺物 …… 59
第67図　第32・33号住居跡 …… 60
第68図　第１号掘立柱建物跡 …… 61
第69図　第９号土壙 …… 62
第70図　第９号土壙出土遺物 …… 62
第71図　遺構外出土遺物（奈良・平安時代）…… 62
第72図　中世出土遺物 …… 65
第73図　中世土壙 …… 66
第74図　土壙 …… 67
第75図　溝跡土層断面図 …… 68
第76図　ピット（1） …… 69
第77図　ピット（2） …… 70
第78図　丘陵地の縄文遺跡 …… 74
第79図　谷ツ遺跡遺構配置図 …… 77
第80図　第Ⅰ－Ⅱ期の住居跡出土土器 …… 80
第81図　第Ⅲ－Ⅵ期の住居跡出土土器 …… 81
第82図　谷ツ遺跡の集落変遷図 …… 83
第83図　谷ツ遺跡の時期別集落変遷図（1） …… 84
第84図　谷ツ遺跡の時期別集落変遷図（2） …… 85
第85図　谷ツ遺跡の時期別集落変遷図（3） …… 86
第86図　粕川流域の遺跡位置図 …… 88
第87図　粕川流域の集落変遷図 …… 89
第88図　谷ツ遺跡における食器の組成変化 …… 92
第89図　谷ツ遺跡における煮沸具の組成変化 …… 93
第90図　谷ツ遺跡における貯蔵具の組成変化 …… 94
第91図　谷ツ遺跡への土器の供給 …… 95
第92図　谷ツ遺跡周辺図 …… 96
第93図　「谷ツ城跡」全体図 …… 99

図版目次

図版1　1．谷ツ遺跡西区調査区全景
2．第1・9号住居跡
3．第2号住居跡
4．第3号住居跡
5．第4・34号住居跡

図版2　1．第6号住居跡 遺物出土状況
2．第6号住居跡
3．第10号住居跡
4．第11号住居跡
5．第12号住居跡
6．第13号住居跡
7．第14号住居跡
8．第15号住居跡

図版3　1．第17号住居跡
2．第18号住居跡
3．第19号住居跡
4．第19号住居跡 カマド
5．第19号住居跡 カマド
6．第20号住居跡
7．第21号住居跡
8．第24号住居跡

図版4　1．第24号住居跡 カマド
2．第24号住居跡 遺物出土状況
3．第27号住居跡
4．第29号住居跡
5．第31号住居跡
6．第32号住居跡
7．第1号掘立柱建物跡
8．第2号溝跡

図版5　1．第1号住居跡　第23図1
2．第1号住居跡　第23図4
3．第1号住居跡　第23図5
4．第5号住居跡　第27図1
5．第6号住居跡　第30図6
6．第6号住居跡　第30図7
7．第6号住居跡　第30図8
8．第10号住居跡　第34図3

図版6　1．第12号住居跡　第37図3
2．第17号住居跡　第45図3
3．第17号住居跡　第45図4
4．第17号住居跡　第45図7
5．第17号住居跡　第45図8
6．第17号住居跡　第45図10
7．第17号住居跡　第45図16
8．第19号住居跡　第51図1

図版7　1．第21号住居跡　第54図1
2．第21号住居跡　第54図2
3．第24号住居跡　第56図1
4．第24号住居跡　第56図2
5．第24号住居跡　第56図3
6．第6号住居跡　第30図10
7．第12号住居跡　第37図1
8．第1号住居跡　第23図8

図版8　1．第1号住居跡　第23図9
2．第1号住居跡　第23図10
3．第1号住居跡　第23図13
4．第6号住居跡　第30図11
5．第17号住居跡　第45図29
6．第17号住居跡　第54図30

図版9　1．第19号住居跡　第51図4
2．C－6グリッド　第71図3
3．第8号住居跡　第32図2
4．第31号住居跡　第66図5
5．第1号住居跡　第23図16
6．第4号住居跡　第25図2

図版10　1．第12号住居跡　第37図6
2．第18号住居跡　第49図4
3．第19号住居跡　第51図9
4．第24号住居跡　第56図14
5．第24号住居跡　第56図15

6．B－17グリッドピット群　第14図1
図版11　1．第29号住居跡　第12図
2．第29号住居跡・ピット群　第12・14図
図版12　1．遺構外出土土器（1）　第15図
2．遺構外出土土器（2）　第15図
図版13　1．遺構外出土石器（1）　第16図
2．遺構外出土石器（2）第17・18図
図版14　1．遺構外出土石器（3）第16～18図
2．遺構外出土石器（4）第18～20図
図版15　1．遺構外出土石器（5）第19・20図
2．中世出土遺物　第72図

Ⅰ　発掘調査の概要

1．発掘調査に至るまでの経過

埼玉県では、「彩の国５か年計画21」における基本目標の一つ「便利で快適な総合交通体系」を実現するため、平成18年度末までに県民の約９割が高速道路のインターチェンジに20分以内でアクセスできるようになることを政策指標に、県土の骨格となる高速道路網やインターチェンジへのアクセス道路の整備推進に取り組んでいる。

関越自動車道（仮称）小川・嵐山インターチェンジの整備についても、こうした施策の一環として進められている。

埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係部局との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。（仮称）小川・嵐山インターチェンジ建設にかかる埋蔵文化財の所存および取り扱いについては、平成12年３月10日付け道建第667号で、埼玉県土木部道路建設課長より文化財保護課あて照会があった。

文化財保護課では確認調査を実施し、埋蔵文化財の所存が確認されたため、道路建設課長あて平成12年６月20日付け教文第324号で、谷ツ遺跡の取り扱いについて回答を行った。

また、その後新たに取得された土地については別途確認調査を実施し、その結果を道路街路課長あて平成13年９月４日付け教文第810号で追加の回答を行った。

1　埋蔵文化財の所在

工事予定地内には、次の埋蔵文化財包蔵地が所存します。

名称(No.)	種別	時代	所在地	員数
谷ツ遺跡 (No.36－189)	集落跡	縄文 平安	嵐山町大字杉山字谷ツ152他	1

2　取り扱いについて

別図に示した埋蔵文化財の所存する範囲については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施してください。

また、その他の範囲については工事に着手して差し支えありませんが、工事中新たに埋蔵文化財を発見した場合には、直ちに工事を中止して、取扱いについて当課と協議してください。

発掘調査については、実施機関である財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と工事主体者の日本道路公団・嵐山町と文化財保護課の四者により調査方法、期間、経費などの問題を中心に協議が行われた。その結果、平成13年８月１日～同11月30日（道路公団）、平成13年９月17日～同10月９日（嵐山町分）という期間で、発掘調査を実施することになった。

なお、平成13年７月26日付けで、日本道路公団東京建設局長、埼玉県教育委員会教育長、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長の３者で発掘調査の実施に関する協定を締結した。

文化財保護法第57条の３の規定による埋蔵文化財発掘通知が日本道路公団東京建設局さいたま工事事務所長及び嵐山町長からそれぞれ提出され、第57条第１項の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査に係る通知は以下のとおりである。

谷ツ遺跡

平成13年８月８日付け教文第２－49号

（文化財保護課）

2．発掘調査・報告書作成の経過

（1）発掘調査

谷ツ遺跡の調査は、平成13年8月1日から11月30日までおこなった。調査面積は5,650㎡である。

調査区全体を4つに区分し、西側からA～D区とした。A区は当初に調査を開始した区域、B・C・D区は県文化財保護課の試掘によって、新たに調査範囲として追加された区域である。調査面積は、A区が1,750㎡、B区が2,300㎡である。C・D区はインターチェンジに外周する嵐山町道を建設する区域で、C区は日本道路公団分、D区は嵐山町分にあたる。調査面積は、C区が350㎡、D区が1,250㎡、合計1,600㎡である。（調査区別内訳表を参照）調査区全体ではA・B区とC・D区の2ヶ所にわけられることから、A・B区を西区、C・D区を東区とした（第5図）。

次に発掘調査の実施経過は以下のとおりである。最初に着手するA区内には蔓草が繁茂していたため、8月初旬に準備作業として、A区内の草刈工事から開始した。次に、事務所ユニット・駐車場の設営、器材搬入を8月9日までにおこなった。

調査は草刈工事完了後、A区から開始した。早期に嵐山町道の工事に入る関係から、A区の調査終了後、C・D区の調査を先行し、最後にB区の調査をおこなった。

11月15日にA・B区の空中写真測量をおこない、調査区全体の詳細な遺構分布状況を把握した。11月22日から重機によるA・B区の埋め戻しを開始し、並行して遺物・器材の搬出、事務所ユニット・駐車場砕石の撤去をおこない、30日までに調査を完了した。詳細は作業経過表のとおりである。

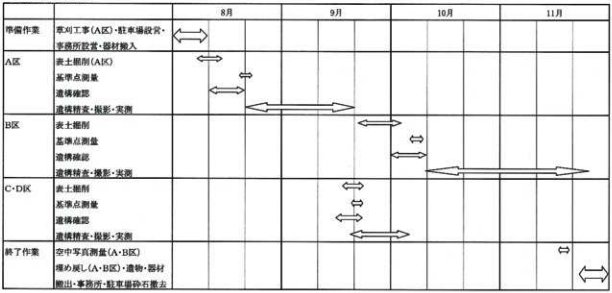
（2）整理・報告書作成

整理作業は平成14年4月8日から9月30日まで実施した。4月に遺物の水洗・註記から開始し、接合・復元作業を5月下旬までおこなった。遺物の実測を5月から開始し、6月下旬までおこなった。遺物トレースを5月中旬から開始し、6月下旬には遺物の版組作業に入った。一方、4月下旬から遺構図の第2次原図作成を開始し、仮の版下作成を経て7月上旬までに版下作成を終えた。遺物観察表、調査区全体図、遺跡位置図、遺跡分布図の作成を6月下旬におこない、原稿執筆を6月からおこなった。7月には遺物の写真撮影を経て遺構・遺物の写真図版を作成し、割付作業をおこなってこれらを完成し、7月末に実作業を終了した。その後、校正作業をおこない、9月末に印刷を終了して本書を刊行した。

谷ツ遺跡調査区別内訳表

	調査面積	調査期間	検出遺構	備考
A区	1,750㎡	8月7日～9月17日	住居跡16（縄文中期2、奈良・平安14）、掘立柱建物跡1（奈良・平安）、土壙6（中世1、その他5）、溝跡2	インターチェンジ建設区域で当初の調査区
B区	2,300㎡	9月21日～11月22日	住居跡12（縄文中期1、奈良・平安11）、土壙4（奈良・平安1、その他3）、溝跡2	インターチェンジ建設区域で追加した調査区
C区	350㎡	9月17日～10月5日	住居跡3（奈良・平安）	嵐山町道建設区域で日本道路公団分
D区	1,250㎡		住居跡3（奈良・平安）、中世城郭にかかわる堀跡1、土壙1（中世）、溝跡3、ピット群1ヶ所（縄文）	嵐山町道建設区域で嵐山町分
合計	5,650㎡	8月1日～11月30日（準備・終了作業を含む）	住居跡34（縄文中期3、奈良・平安31）、掘立柱建物跡1（奈良・平安）、中世城郭にかかわる堀跡1、土壙11（奈良・平安1、中世2、その他8）、溝跡7、ピット群1ヶ所（縄文）	

谷ツ遺跡作業経過表



3．発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者　財団法人　埼玉県理蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査

平成13年度

理事長	中野健一
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	大舘　健
管理部	
管理幹	持田紀男
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池　久
調査部	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	坂野和信
主席調査員	昼間孝志
主任調査員	君島勝秀
主任調査員	上野真由美

(2) 整理・報告書刊行

平成14年度

理事長	桐川卓雄
副理事長	飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長	大舘　健
管理部	
管理幹	持田紀男
主任	江田和美
主任	長滝美智子
主任	福田昭美
主任	腰塚雄二
主任	菊池　久
調査部	
調査部長	高橋一夫
調査部副部長	坂野和信
主席調査員	磯崎　一
統括調査員	黒坂禎二
主任調査員	君島勝秀

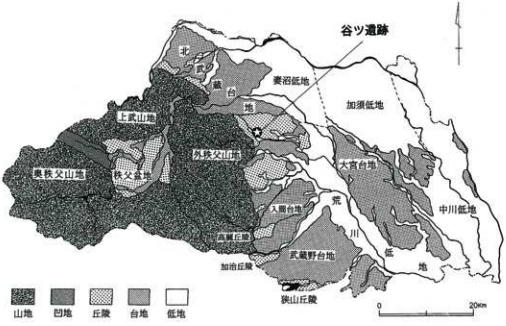
Ⅱ 遺跡の立地と環境

谷ツ遺跡は埼玉県中央部、比企郡嵐山町大字杉山に所在し、東武東上線武蔵嵐山駅から北西約12kmの地点に位置する。遺跡の所在する北比企丘陵は、秩父山地の外縁部から東方にのびる丘陵地帯であり、滑川、粕川、市野川、兜川、槻川によって開析され、いく筋もの低く細長い尾根筋が南東方向につらなる景観を呈している。尾根筋は標高約130～80m級の山々がつらなり、周囲には谷戸が発達していて、農業用水の溜池が無数に存在する。

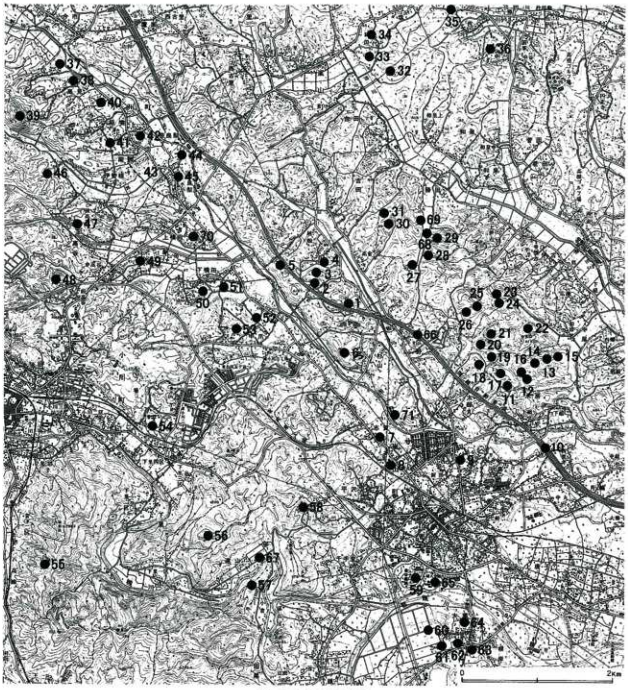
北比企地域は、中近世の古文書に城跡や古戦場などが記され、鎌倉街道の要衝であったことから、中世・戦国時代の歴史の舞台になったところとして古くから知られていた。中世遺跡では菅谷館跡をはじめ、杉山城跡、高見城跡など、いくつかの城跡が知られており、こうした城館跡の史跡整備にともなう発掘調査や、分布調査がつみかさねられてきた。近年では、丘陵地帯での関越自動車道をはじめとする道路建設や、ゴルフ場、工業団地などの造成や、低丘陵や台地部での圃場整備、区画整理事業にともなう発掘調査によって、北比企地域における先史・古代の遺跡の様相がつかめるようになってきた。

谷ツ遺跡は粕川に開析された谷戸に面した丘陵斜面から尾根上にかけて立地する。周辺の市野川、粕川流域の遺跡をその分布状況で大きくわけると、市野川、粕川、滑川によって開析された標高100～70mの比較的高所の丘陵地帯、市野川流域右岸の沖積地に面した台地部、槻川、兜川流域の山間部、都幾川流域の河岸段丘上の4つの遺跡群にわけられる。このなかでもさらに、丘陵地帯では尾根頂部や肩部、谷戸に面した斜面部や流域の沖積地に面した低丘陵部などの立地状況の違いがみられる。谷ツ遺跡は丘陵地帯の遺跡群のなかのひとつだが、こうした遺跡の分布や立地状況は、各時代、各時期によって特徴的な傾向がみられる。こうした分布状況を念頭に、時代順に周辺遺跡を概観することにする。

まず、旧石器時代では表採される程度で、非常に希薄である。縄文時代草創期では、久保ケ谷戸遺跡(52)で柳葉形の頁岩製石槍が出土している。滑川



第1図　埼玉の地形



第２図　遺跡分布図

1　谷ツ遺跡　2　小栗遺跡　3　小栗北遺跡　4　大木前遺跡　5　越畑城跡　6　杉山城跡　7　深沢遺跡　8　金平遺跡　9　花見堂遺跡　10　屋田遺跡　11　年中坂Ａ遺跡　12　滑川町蟹沢遺跡　13　用土庵Ａ遺跡　14　用土庵Ｂ遺跡　15　天裏遺跡　16　細沼東遺跡　17　年中坂Ｂ遺跡　18　西亥遺跡　19　中西遺跡　20　亥遺跡　21　中尾遺跡　22　二ッ沼南遺跡　23　代田嶺Ａ遺跡　24　代田嶺Ｂ遺跡　25　柳沢Ａ遺跡　26　柳沢Ｂ遺跡　27　新田坊遺跡　28　尺尻遺跡　29　尺尻北遺跡　30　芳沼入遺跡　31　嵐山町蟹沢遺跡　32　諸ヶ谷遺跡　33　塩新田遺跡　34　狸塚遺跡　35　船川遺跡　36　釜場遺跡　37　日丸遺跡　38　町場遺跡　39　高見城跡　40　六所遺跡　41　大杉遺跡（事業団平成６年度調査）　42　大杉遺跡（小川町第２次調査）　43鎌倉街道上道跡　44　台ノ前遺跡　45　奈良梨館跡　46　天神谷遺跡　47　北蟹山遺跡　48　高谷砦跡　49　中井遺跡　50　稲岡遺跡　51　越祢遺跡　52　久保ヶ谷戸遺跡　53　日向遺跡　54　平松台遺跡　55　青山城跡　56　内寒沢遺跡　57　小倉城跡　58　旧平沢寺僧坊跡群　59　菅谷館跡　60　行司免遺跡　61　宮の裏遺跡　62　大蔵館跡　63　源義賢墓　64　向徳寺　65　寺山遺跡　66　中郷遺跡　67　山根遺跡　68　大野田遺跡　69　大野田西遺跡　70　峯原遺跡　71　六丁遺跡

第3図　谷ツ遺跡位置図（1）

1　谷ツ遺跡　2　小栗遺跡　3　小栗北遺跡　4　大木前遺跡　5　越畑城跡　6　杉山城跡

町打越遺跡では多縄文系土器群がまとまって出土している。

早期前半では、寺山遺跡（65）で撚糸文土器が、屋田遺跡（10）では撚糸文土器とともに押型文土器が、越畑城跡（5）、年中坂A遺跡（11）、用土庵B遺跡（14）では撚糸文土器、沈線文土器が出土している。また、江南町の滑川流域左岸では塩新田遺跡(33)、狸塚遺跡（34）で撚糸文土器が出土している。

早期後半の条痕文期になると、丘陵地帯の頂部平坦面や肩部に炉穴が構築されるようになる。亥遺跡(20）では条痕文期と思われる炉穴10基が発見され、屋田遺跡では条痕文期の集石1基が報告されている。一方、市野川右岸流域では沖積地に面した低丘陵部や台地斜面でも条痕文期の遺跡が見られるようになる。日丸遺跡（37）、町場遺跡（38）、北蟹山遺跡(47）では条痕文土器が出土し、金平遺跡（8）では野島式期の住居跡6軒とこれらの住居跡に重複して炉穴5基が検出された。槻川流域の平松台遺跡(54)では早期終末の入海式土器が出土している。

前期になると、各遺跡から発信される情報は量質ともさらに豊富になる。丘陵地帯では尺尻遺跡(28)で諸磯b式期の住居跡1軒と集石2基、尺尻北遺跡(29）で諸磯c式期の住居跡1軒と土壙2基が検出されたほか、新田坊遺跡（27）、芳沼入遺跡（30）でも前期後半の土壙が発見されている。この他、丘陵地帯や市野川流域の多くの遺跡で、諸磯式から前期終末にかけての土器が出土しているが、いずれも諸磯b式期を中心とした前期後半が主体となる。一方、槻川流域の河岸段丘面では、山根遺跡（67）で黒浜期から諸磯b式期にかけての住居跡12軒が検出されているほか、槻川、兜川流域の山間部に目を転じると、八幡台遺跡、平松台遺跡では前期前半の集落が検出され、宮山遺跡、別所遺跡、笠郷遺跡などで前期前半の土器が出土している。

中期前半は概して遺跡の分布は希薄になるが、中期後半にはふたたび増加して、台地部や低位の広い河岸段丘上に大きな集落がいとなまれるようになる。町場遺跡は市野川右岸の台地上に立地する。現水田面にむかう低台地の斜面に、勝坂期の良好な包含層が形成されている。台ノ前遺跡（44）では良好な勝坂式土器が出土していて、遺構の存在の可能性が指摘されている（谷井1984)。

行司免遺跡（60）は都幾川右岸の河岸段丘上にいとなまれた大環状集落で、勝坂式から加曽利E式までを主体とし、一部後期初頭までふくめて、住居跡261軒、集石土壙131基、土壙9基、土器捨て場2ヶ所が検出された。周辺地域の中核となる集落とかんがえられる。丘陵地帯では中郷遺跡（66）で加曽利E式期の住居跡7軒、市野川右岸では金平遺跡で加曽利E式終末期の住居跡1軒が検出された。

後・晩期は遺跡が激減する。後期では大野田遺跡(68)、大野田西遺跡（69)、年中坂A遺跡などで土器が出土している程度である。晩期では、行司免遺跡で安行式土器が、花見堂遺跡（9）、屋田遺跡で浮線網状文土器が出土している。

ひきつづき弥生時代もこの傾向はかわらず、前期、中期の遺跡はほとんど存在しない。後期になると嵐山町蟹沢遺跡（31）で住居跡11軒、大野田遺跡で住居跡25軒が検出されていて、河川流域の比較的幅の広い沖積地に面した丘陵斜面や谷頭にちかい丘陵尾根上に、吉ヶ谷式系の集落が進出する様子がかいまみられる。

古墳時代前期も弥生時代と同様、遺跡数が少なく、屋田遺跡では集落跡、行司免遺跡では前期から中期にかけての方形周溝墓と住居跡が調査されている。市野川流域では越祢遺跡（51)、峯原遺跡が存在する。古墳は市野川流域で物見塚古墳、東昌寺古墳群、東側古墳群、屋田古墳群、花見堂古墳群などで円墳が確認されている。都幾川流域では、稲荷塚古墳、寺山古墳群、向原古墳群、山王古墳群、石堂古墳群で確認されている。

奈良・平安時代になると、遺跡数はふたたび多くなる。丘陵地帯では滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群で13遺跡、嵐山工業団地関係で4遺跡が確認されて

いる。天裏遺跡（15）では丘陵項部の平坦面から斜面にかけて該期の住居跡36軒、掘立柱建物跡１棟が展開する。遺跡の南側から開析された谷戸は、東にまわりこんで比較的幅広の沖積地を形成している。住居跡が10軒以上検出された遺跡をみてみると、天裏遺跡と同様に、幅広い谷戸に近接した丘陵の東斜面から南斜面にかけて立地している傾向がうかがえる。柳沢A遺跡（25）で15軒、柳沢B遺跡（26）で11軒、嵐山町蟹沢遺跡で12軒、新田坊遺跡で11軒が検出されていて、比較的広い谷戸ごとに中心的な集落が対応するかたちになる。粕川流域の大木前遺跡（４）でも天裏遺跡の立地環境と共通していて、丘陵部斜面に該期の住居跡26軒が検出されている。柳沢A遺跡では四面庇付掘立柱建物跡２棟、天裏遺跡で二間×三間の掘立柱建物跡１棟というように、中心的な集落には掘立柱建物跡がともなうことも興味深い。年中坂A遺跡では住居跡とともに須恵器窯跡が検出された。用土庵B遺跡、中尾遺跡（21）では瓦塔が出土している。また、滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群では、奈良・平安時代の遺跡から多くの炭焼窯跡が報告されていて、丘陵地帯の集落のありかたとしても示唆的である。

転じて、市野川流域でも多くの遺跡が確認されている。日丸遺跡では大型掘立柱建物跡が検出された。大杉遺跡（41）では小鍛冶関連遺構が検出されている。六丁遺跡（71）では該期の住居跡34軒が報告されている。槻川、都幾川流域では耕地遺跡、平松台遺跡などが知られている。

中世になると、鎌倉街道上道がこの地を通るために、周辺地域には重要な中世遺跡が多くのこされている。鎌倉街道上道は笛吹峠をこえ、将軍沢、大蔵で都幾川をわたって菅谷、志賀から市野川右岸を北上し、小川町奈良梨を経てさらに北上する。昭和56・57年度には埼玉県教育委員会によって、地理的、歴史的環境の現状調査がおこなわれた結果、小川町伊勢根（43）で堀割状道路遺構が検出され、鎌倉街道上道跡とかんがえられている（県教委1983）。

鎌倉街道上道が都幾川をわたるところには、大蔵館跡（62）が築かれた。大蔵館跡は単郭式方形館で、従来は仁平三年（1153）～久寿二年（1155）の源義賢の居館といわれてきたが、発掘調査では主体となる遺構は13～14世紀という結果がでている。館跡の西側に位置する行司免遺跡では、同時期の住居跡とかんがえられる竪穴状遺構や井戸跡、溝跡などが検出されていて、企画性の高い中世遺跡であることが判明した。近接する宮ノ裏遺跡（61）では大量の中世瓦が出土している。こうした周辺遺跡の状況もあわせて、大蔵館跡が南北朝時代に新田氏と足利氏の戦乱のなかで軍事的要衝となった可能性が指摘されている（植木1987）。

現在国指定史跡になっている菅谷館跡（59）は、鎌倉時代に畠山重忠の居館とつたえられ、戦国時代まで複郭式平城に発展、継続する。菅谷館跡から鉢形城跡までの鎌倉街道上道沿いには、杉山城跡（６）、越畑城跡、高見城跡（39）などの山城があり、戦国時代において、後北条氏の支城制によって甲斐の武田氏、越後の上杉氏に対する防衛ラインとして機能していたとかんがえられる。

引用・参考文献

植木智子　2000　「金平遺跡Ⅱ」嵐山町遺跡調査会報告９　嵐山町遺跡調査会

植木　弘　1987　「埼玉県指定史跡　大蔵館跡」嵐山町埋蔵文化財調査報告３　嵐山町教育委員会

植木　弘・植木智子　1988　「行司免遺跡・本文編」嵐山町遺跡調査会報告４　嵐山町遺跡調査会

上野真由美　1998　「大杉遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第203集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

小川町　1999　「小川町の歴史　資料編1」

小野義信　1979　「越畑城跡」埼玉県遺跡発掘調査報告書第20集　埼玉県教育委員会

金井塚良一・植木　弘　1980　「金平遺跡」嵐山町教育委員会

川口　潤　1992　「蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団

江南町　1995　「江南町史　資料編1」

埼玉県教育委員会　1983　「鎌倉街道・上道」歴史の道調査報告書第１集

埼玉県埋蔵文化財調査事業団　1984　「関越自動車道関係　屋田・寺ノ台」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第32集
埼玉県埋蔵文化財調査事業団

佐藤康二　1994　「大野田西遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団

谷井　彪　1984　「小川町草加出土の土器をめぐって」『研究紀要』第６号　埼玉県立歴史資料館

吉田義和　2001　「町内遺跡発掘調査報告書Ⅶ」小川町埋蔵文化財調査報告書第16集　小川町教育委員会

嵐山町　1983　「嵐山町史」

嵐山町教育委員会　1992　「埼玉県指定史跡　杉山城保存管理計画書」嵐山町教育委員会

Ⅲ 遺跡の概要

谷ツ遺跡は、比企郡嵐山町大字杉山地内の丘陵上に立地する。市野川と粕川にはさまれた標高100～70ｍの細長い尾根筋が北西―南東方向につらなっている。これらのうち、粕川に開析された長い谷の入り口部分に面した丘陵の南斜面に立地している。周辺の丘陵上には縄文時代や奈良・平安時代の集落跡である大木前遺跡、小栗北遺跡、小栗遺跡が立地する。市野川ぞいにつらなる尾根上には越畑城跡、杉山城跡がある。

遺跡がのる丘陵は標高約91ｍの最高所から東にのびる標高70～80ｍの尾根筋である。尾根の東側には、粕川によって開析されるやや幅広い沖積地が広がっていて、そこから西側にむかって長い谷が入りこんでいる。このように、遺跡は東側から南側にかけて、沖積地と谷に面した尾根の鞍部から南側斜面に立地している。北側斜面から北東斜面にかけては現在農業用水の溜池がある急峻な谷が入り、南側斜面と比較して急な斜面を形成している。最高所へとつづく西側斜面には谷地形によるくびれがあり、遺跡範囲の西端を画している。遺跡内の最高標高は84ｍを測り、谷部との比高差は約20ｍである。

調査区は、遺跡範囲全体のなかでは西側部分と中央部分にあたる２ヶ所である。西側部分の調査区を西区（Ａ・Ｂ区）、中央部分の調査区を東区（Ｃ・Ｄ区）とした（第４図）。２ヶ所とも尾根の頂上から南斜面にかけての部分にあたる。

遺構確認面は地表下約30cmと浅く、西区（Ａ・Ｂ区）の尾根頂上部分には一部ソフトローム層がのこるが、斜面地では土砂の流出が著しく、粒の粗い黄白色粒子を多く含んだ褐色土が地山となる。西区の中央部分には地割によるとおもわれる削平や段差が各所にみられ、西区東側部分には、昭和初期の家屋跡による削平がみられた。

調査区全体で検出された遺構は、縄文時代では住居跡３軒とピット群１ヶ所、奈良・平安時代では住居跡31軒、掘立柱建物跡１棟、土壙１基、中世では城郭にかかわる堀跡１条、土壙２基、その他の遺構では、土壙８基、溝跡７条である。

縄文時代の住居跡は、西区の尾根鞍部から斜面にかかるところで第２・３号住居跡が重複して検出された。いずれも土砂流出が著しく、床面がのこらないが、第２号住居跡の炉跡から加曽利ＥⅡ式土器の胴部が出土した。第29号住居跡は、西区の斜面地から検出された住居跡で、地床炉が２ヶ所検出され、覆土中から勝坂式土器が出土した。ピット群は、東区の尾根鞍部にさしかかる手前の斜面部から検出された。５基のピットからなり、ピット内から諸磯式土器と石器類が出土した。

この他、遺構外や他の遺構内に混入して、諸磯ｂ式、阿玉台式、勝坂式、加曽利ＥⅡ式、加曽利ＥⅢ式の各種土器がわずかながら出土した。また、西区Ｂ－４グリッドでは切株の根にからんで多量の石器類が出土した。

奈良・平安時代の遺構・遺物は、量質ともに今回の調査で中心を占めるものである。住居跡では、尾根鞍部の比較的平坦な面で、西区２軒、東区１軒の計３軒が検出された他は、多くの住居跡が斜面地から検出された。斜面地の住居跡は、南側が土砂流出してのこらない状態だったが、北壁にあるカマドは遺存状態がよく、焚口部に片岩を橋状に組んだもの（第19号住居跡）や、粘土で作りつけたカマド正面部が火災焼失によって焼土化してのこったもの（第24号住居跡）がみられた。また、カマド煙道部の天井が崩落せずに残っていたものも数例みられた。

カマドは、北壁にとりつくものと東壁にとりつくものにほぼ二分されるが、第18号住居跡は北壁と東壁の両方にカマドがのこる唯一の遺構である。第６・17・18・31号住居跡は、カマド周辺の床面上に坏や甕の出土をみた他、第24号住居跡では鎌の刃などの鉄製品も出土した。

第4図　谷ツ遺跡位置図（2）

今回の調査では、多くの住居跡のカマド内やカマド周辺部から熱をうけて赤く焼けた片岩が出土した。これらの片岩は、カマドの焚口や両袖部に補強材として使用されたものとおもわれる。このように、片岩をカマドの補強材もしくは構築材に用いたとおもわれる住居跡は13軒あり、全体の住居跡の約４割に及んだ。

13軒の内訳をみると第19号住居跡のようにカマド焚口部に片岩が橋状にかかっているものが最も遺存状態が良い例で、他に第17・18・24号住居跡のように、カマド内壁に片岩が補強材として貼りついていたものもあった。しかし、多くの住居跡は、カマド周辺部に片岩が散在した状態で検出されており、遺存状態は一様ではない。

第１号掘立柱建物跡は、西区中央の斜面地で検出された５間×２間の大型の建物跡である。土砂流出のため、南側の柱穴は浅いが、北側は深さ約50cmのものがある。柱穴の並びはややゆがんだ長方形になる。出土遺物もなく、やや規格性が弱いが住居跡と重複しない位置にあることから、住居跡と何らかの関係があるものとおもわれ、奈良・平安時代の遺構と判断した。

住居跡からの出土遺物は、概ね８世紀前葉から10世紀後半の土器が出土した。第17号住居跡からの出土遺物が最も多く、第１・６・10・18号住居跡などからも一定量の遺物が出土した。

また、今回鉄製品の出土が目立った。第１・４・18・19・24号住居跡などから鎌（第23図16、第56図14）、刀子（第25図２）、鉄鏃（第49図４）、鉄製紡錘車（第51図９）が出土している。また、第12号住居跡では鉄滓（第37図６）が出土し、野鍛冶関連の遺物として注目される。

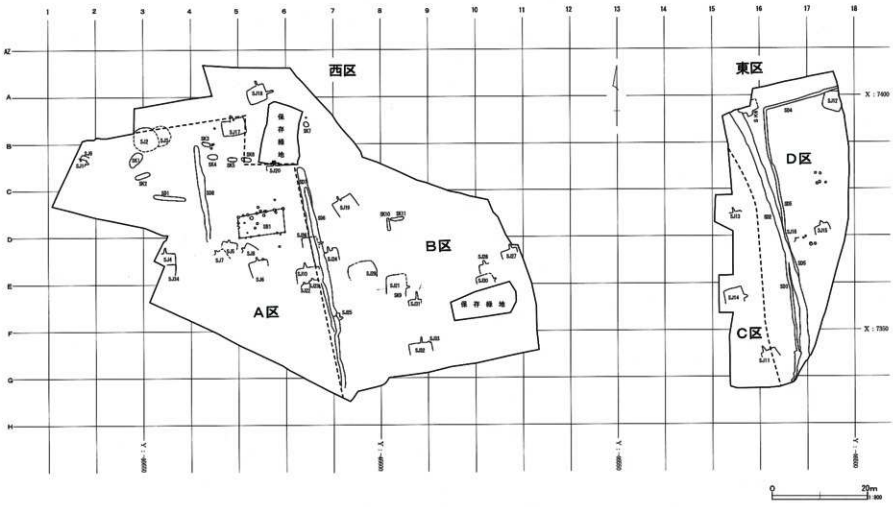
紡錘車では、上記の鉄製の他、第8号住居跡からは土製紡錘車（第32図２）が、第31号住居跡からは石製紡錘車（第66図５）が出土した。この他、遺構外出土ではあるが、墨書土器（第71図３）が出土していることも注目される。

今回の調査のもうひとつの成果として、中世城郭にともなう堀跡が検出されたことがあげられる。第２号溝跡は、東区から検出されたもので、調査区内を南北に走り、幅約２ｍ、深さ約1.5ｍの箱薬研堀となる。この溝跡は、調査区ののる丘陵の尾根筋をほぼ直交する。周辺踏査の結果、調査区の東側につらなる丘陵先端部には、平場と土塁状遺構が地表面から観察され、中世城郭の存在を確認するにいたった。

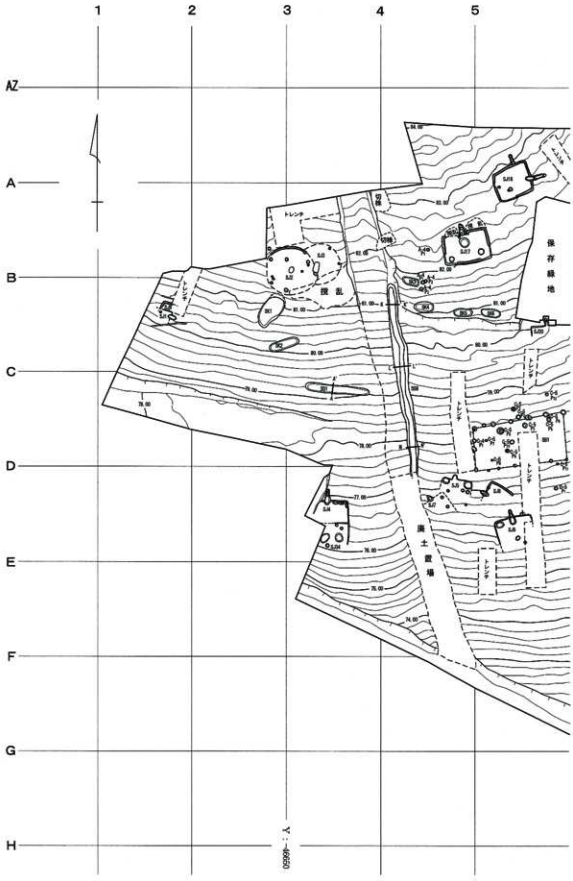
第２号溝跡はこの城郭にともなう堀切であり、敵の侵入を防ぐために、尾根筋に対して直交するように掘りこまれた溝跡であるとかんがえられる。

この他、第６号土壙は第２号溝跡の壁面を利用して作られた中世の地下式壙である。

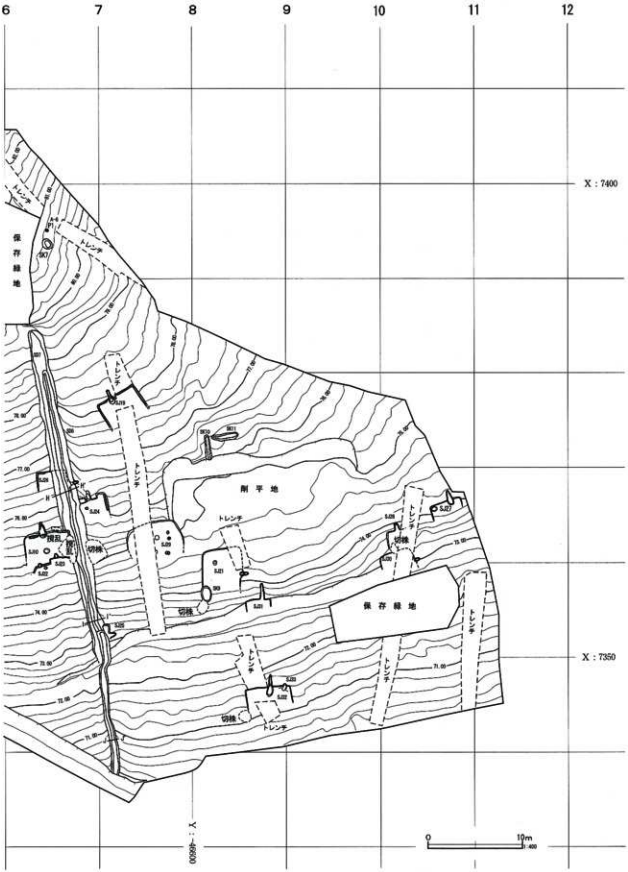
その他の遺構としては、西区の尾根鞍部の平坦面を中心に長楕円形の土壙が４基検出されたが、遺構の時期や性格を確定するにはいたらなった。第３～８号溝跡は、調査区以前の地境に走ることから、近世以降の区割溝とかんがえられる。

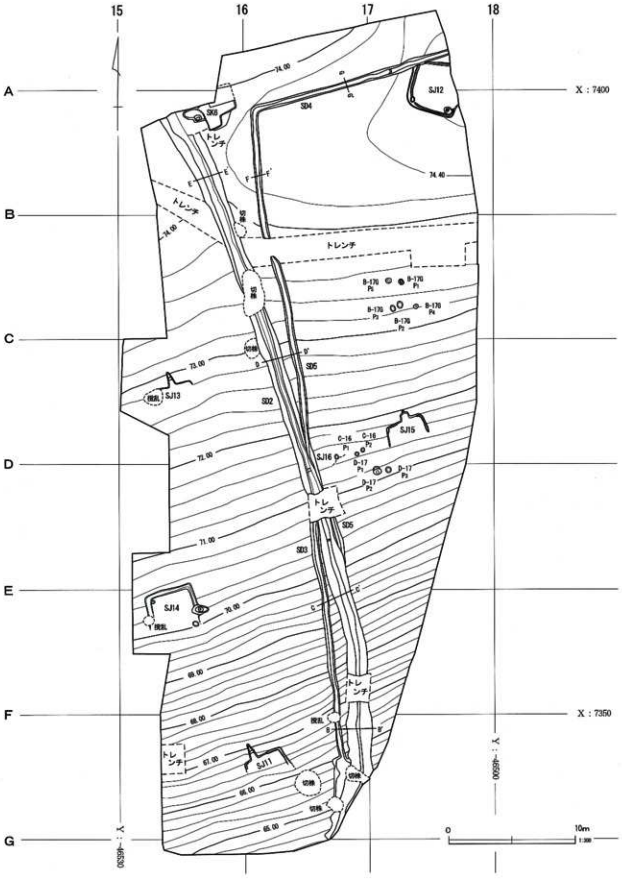


第５図　谷ツ遺跡グリッド網図



第6図　谷ツ遺跡西区全体図


6
7
8
9
10
11
12
X：7400
X：7350
Y：-46000
保存緑地
削平地
トレンチ
切株
0
10m
1:400



第７図　谷ツ遺跡東区全体図

Ⅳ 発見された遺構と遺物

1．縄文時代

(1) 住居跡

第2・3号住居跡（第8図）

A－2・A－3グリッドに位置する。調査区内では急斜面から尾根線上の緩やかな平坦面にかかわる肩部に立地する。この付近にはローム土の堆積がわずかにのこっており、遺構確認面はローム面である。

遺構確認時点ですでに床面が遺存せず、南側も撹乱と斜面流出のためのこりが悪いが、炉跡が2ヶ所検出されたことで住居跡の存在を確認できた。精査の結果、炉跡の周囲にピットが配置され、一部には壁溝が検出されて、2軒の住居跡の重複であることがわかった。

ＳＪ2は、住居中央に炉を配し、周囲にはＰ1～Ｐ9がめぐる。ピットは径30～40㎝、深さ35～70㎝を測る。北側には一部壁溝が遺存しており、これらの配置から遺構の規模は、直径5.3～5.5ｍの円形の住居跡と推定される。炉跡内には底部を欠いた埋甕の出土をみた（第9図1）。ＳＪ3の炉跡にともなう焼土面をＰ7が切って構築されているため、ＳＪ3を切ってＳＪ2が構築されたものと推定される。

ＳＪ3は、炉跡の周囲からＰ10～Ｐ13が検出された。いずれも小さく浅いピットで、径約20㎝、深さ20～50㎝を測る。南側は撹乱をうけており、検出されなかった。遺物は出土していないが、住居形態から中期のものとおもわれる。

出土遺物（第9図）

1は加曽利ＥⅡ式の胴部中位である。縄文を地文として二本の沈線が懸垂する。2は深鉢胴部で、撚糸文を施文する。1と同時期のものとおもわれる。

第29号住居跡（第10・11図）

D－7グリッドに位置する。斜面上に立地し、中央西寄り部分に試掘トレンチがかかる。遺構の掘りこみが深いために床面がよくのこっている。平面形態は多角形に近い円形または楕円形になるものとおもわれる。炉跡は中央からやや北壁寄り部分と南寄り部分の2ヶ所から検出された。いずれも床面が被熱赤化しただけの地床炉で、あまり使用された状態とはおもわれない。床面は平坦であるが、踏み固まった状態ではない。ピットは3基検出された。径約30㎝、深さ約30㎝を測る。床面から覆土内にかけて勝坂式土器の破片が出土した。

出土遺物（第12図）

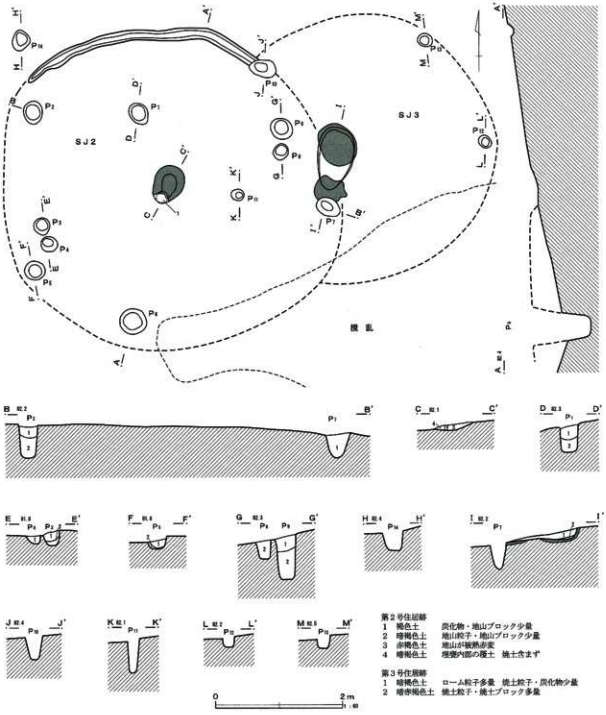
1～3は諸磯式である。1は半截竹管状工具によって、平行沈線間に爪形文を施文する。2は口縁部に平行沈線による波状文が施文される。3は縄文地文に集合沈線が横走する。

4～10、12～15は勝坂式である。4～10は同一個体と思われるもので、胴部の隆帯の両脇にそって爪形文が連続施文される。隆帯は胴部下半を懸垂するものや、楕円文を描いて横位区画するものがみられる。12は口縁部破片であり、口唇状の突起から隆線がおりて、両脇には斜線文が充填される。13・14は爪形文にそって結節沈線を施文する土器である。13の隆帯はジグザグ文が横位に展開するものである。14は三角形の区画文が展開する土器である。15は縄文の末端部に綾繰文がともなう。

11は阿玉台式の胴部である。爪形文が横に連続し、隆帯が垂下する。胎土に金雲母をふくむ。

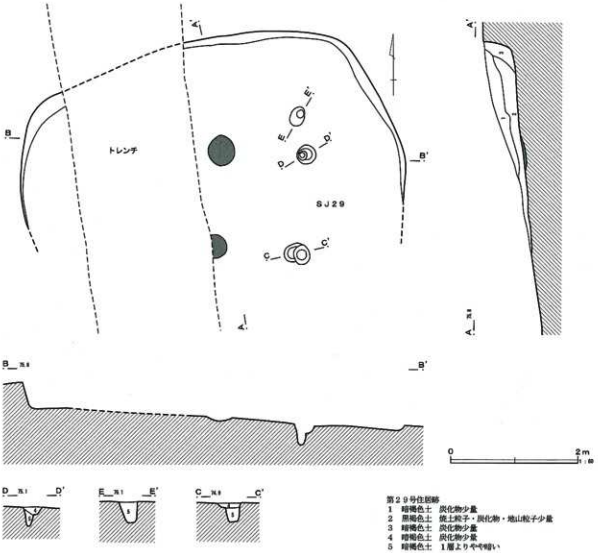
16は加曽利Ｅ式の口縁部である。深い沈線と隆帯の組み合わせによる渦巻き文で、加曽利Ｅ式前半である。

石器は2点出土した。17は礫器である。上端と右下端を欠損する。長さ10.9㎝、幅8.7㎝、厚さ3.3㎝、重さ333.1ｇである。石質は礫質フォルンフェルスである。18は磨石である。長さ9.7㎝、幅7.7㎝、厚さ3.7㎝、重さ459.3ｇである。石質は閃緑岩である。

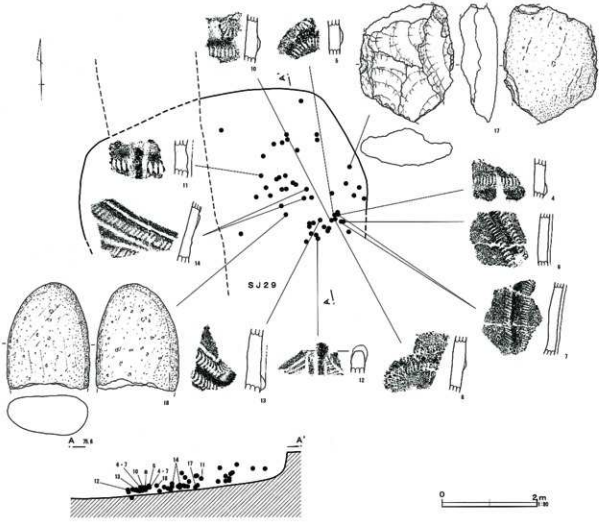

SJ2
SJ3
攪乱
第2号住居跡
1 褐色土 炭化物・地山ブロック少量
2 暗褐色土 地山粒子・地山ブロック少量
3 赤褐色土 地山が被熱赤変
4 暗褐色土 埋甕内部の板土 焼土含まず
第3号住居跡
1 暗褐色土 ローム粒子多量 焼土粒子・炭化物少量
2 暗赤褐色土 焼土粒子・焼土ブロック多量
0 2m

第8図 第2・3号住居跡

第９図　第２号住居跡出土遺物



第10図　第29号住居跡



第11図　第29号住居跡遺物分布図

（2）　ピット群（第13図）

B－17グリッドに位置する。調査区の尾根上にかかる手前の斜面上に立地し、径３ｍの範囲に５基のピットが分布する。ピットは径30～40㎝、深さ約40㎝で、暗褐色土の共通した覆土である。Ｐ１からは土器が、Ｐ３からは石器が３点出土している。住居跡の痕跡の可能性もあるが確証を得られなかった。

出土遺物（第14図）

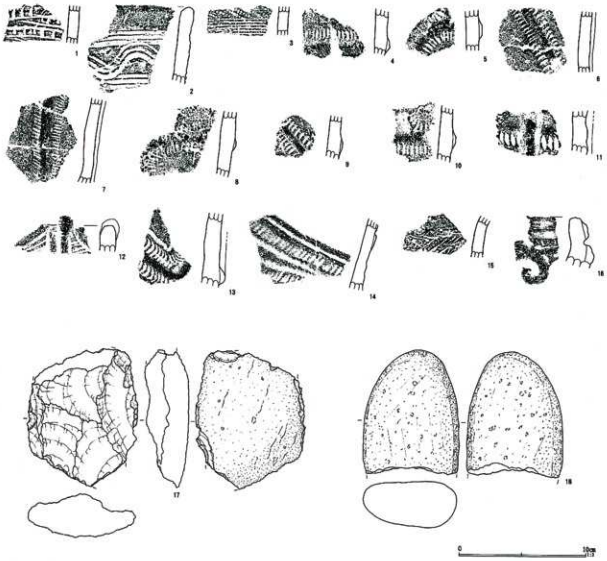
１は諸磯式の胴下部から底部である。底部ぎわまで横位に縄文を施文する。２は二次加工のある剥片である。横長剥片を加工したものか。長さ5.1㎝、幅9.6㎝、厚さ1.2㎝、重さ61.9ｇである。石質はフォルンフェルスである。３・４は磨石で４は凹部をもつ。３は長さ17.5㎝、幅6.7㎝、厚さ1.5㎝、重さ257.6ｇである。石質は緑泥片岩である。４は長さ11.5㎝、幅5.7㎝、厚さ2.5㎝、重さ254.4ｇである。石質は砂岩である。

（3）　遺構外出土遺物（第15～20図）

調査区内からはわずかに縄文土器の散布がみられたが、主に尾根線上の平坦面にある西区のＳＪ17周辺部とＳＪ29周辺部から出土した。出土土器は加曽利Ｅ式が中心で、その他には諸磯ｂ式、阿玉台式が数点出土した。石器については、その大半がＢ－４グリッド内の木株に絡んで出土した。

土器（第15図）

１～３は諸磯ｂ式である。１は矢羽根状の刻み目



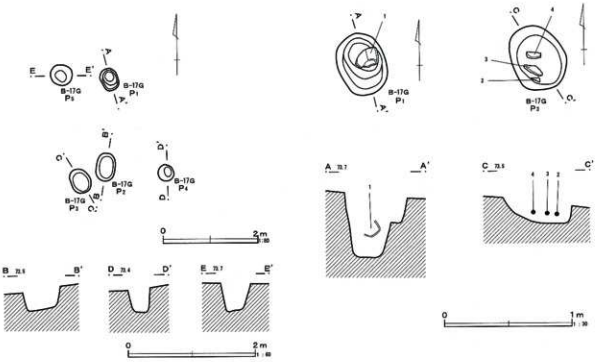
第12図　第29号住居跡出土遺物

をつけた浮線文系土器である。2・3は集合沈線文系土器である。2は地文に縄文が施文される。3は底部破片である。

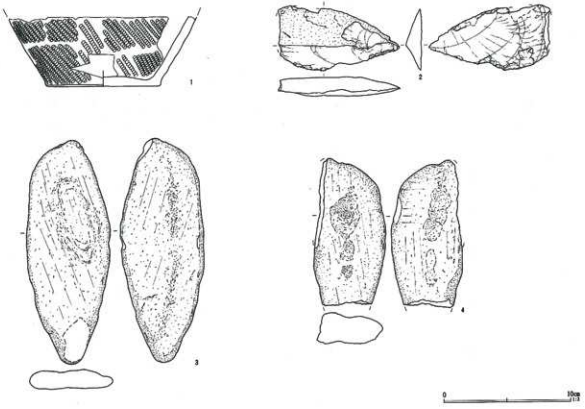
4・5は阿玉台式である。4は断面三角の隆帯が横方向に走る。5は隆帯にそって爪形文が施文されている。

6～31は加曽利E式である。6～14はキャリパー形の口縁部である。6は眼鏡状突起の下に口縁部文様帯の渦巻文が展開する。口縁部の地文は7・9・10が沈線、8が撚糸文、12～14が縄文である。15・16は口縁部下部を横隆帯で区画する。17～19・22・26は胴部に隆帯が垂下するもので、18は隆帯が蛇行する。20・21は幅広の凹線で区画される口縁部で加曽利E Ⅲ式である。23～25・28～30は胴部に沈線が施文されるものである。25・28は胴部にモチーフが描かれるもので、25は上部に小渦巻文が、28は弧線が描かれる。29・30は磨消懸垂文になる。27・30は縄文を地文とする同一個体である。

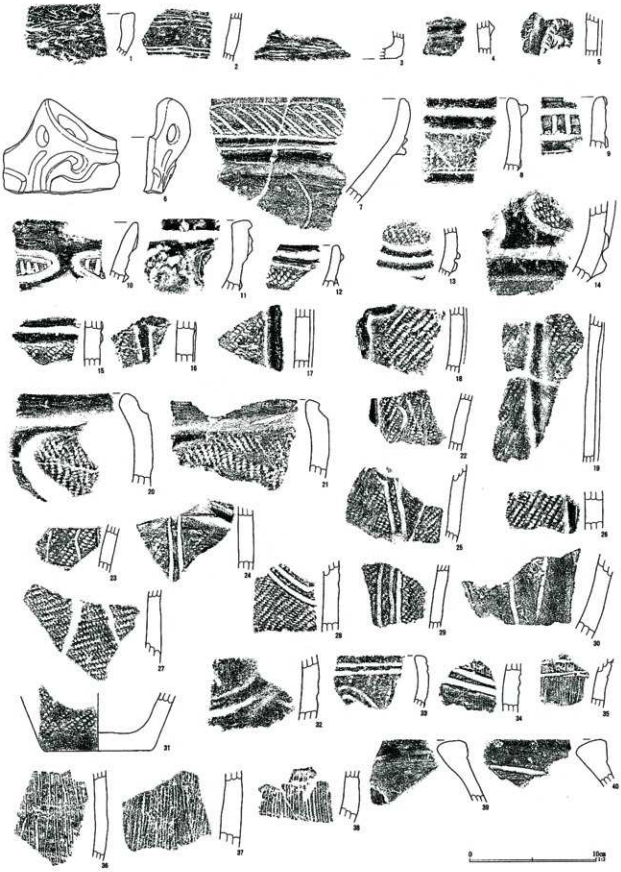
32～35は連弧文系土器である。33が地文縄文で、他は条線である。36～38は中期後半のもので、胴部に条線を施文するものである。39・40は加曽利E式のともなう浅鉢の口縁部である。



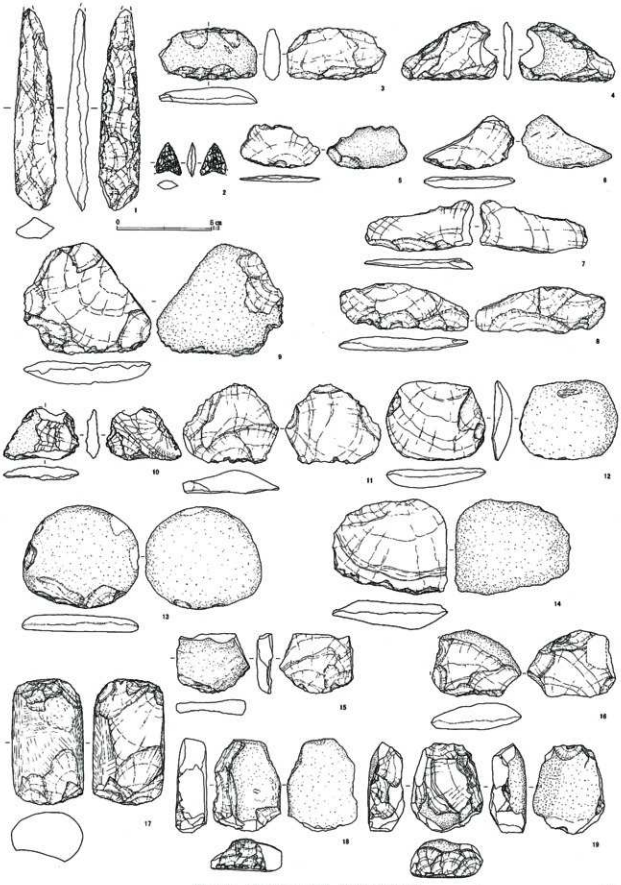
第13図　B－17グリッドピット群



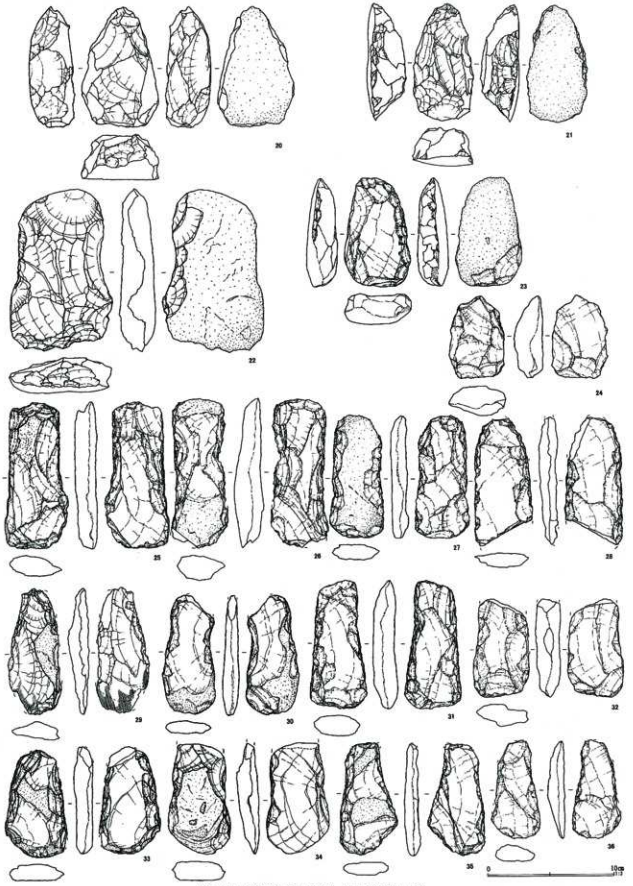
第14図　B－17グリッドピット群出土遺物



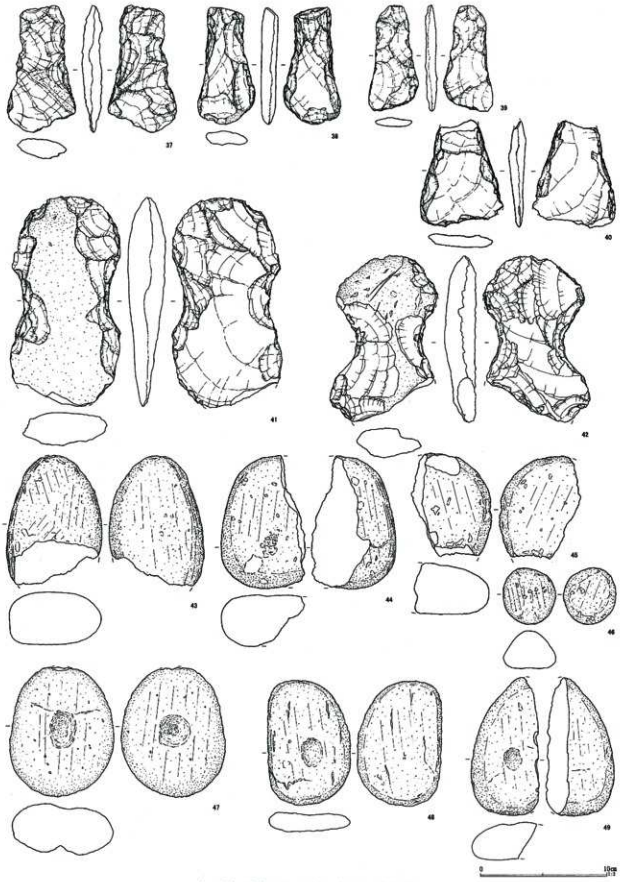
第15図　遺構外出土遺物（縄文時代）（1）



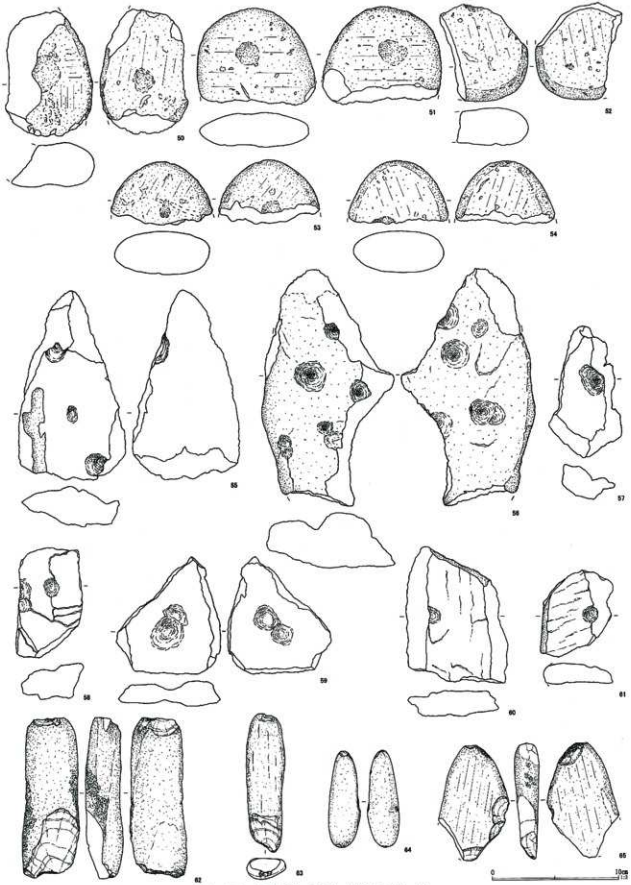
第16図　遺構外出土遺物（縄文時代）(2)



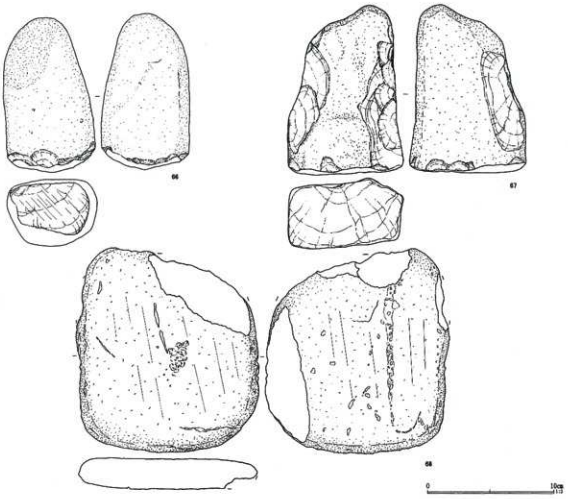
第17図　遺構外出土遺物（縄文時代）（3）



第18図　遺構外出土遺物（縄文時代）（4）



第19図　遺構外出土遺物（縄文時代）(5)



第20図　遺構外出土遺物（縄文時代）(6)

石器（第16～20図）

谷ツ遺跡からは遺構外から多量の石器が出土した。その器種組成は多岐にわたるが、その中でも尖頭器・掻器類・礫を素材とする打製石斧・スタンプ形石器は縄文時代早期に特徴的な石器といえよう。

尖頭器（1）

表面は素材剥片の背面をそのまま利用し、裏面は両縁辺方向からの剥離によって平坦に成形し、最後に表裏両面からの細かい剥離で調整している。横断面形はおおよそ三角形である。

石鏃（2）

無茎で基部に浅い抉りを有する。基部は丁寧に加工が施される。

掻器類（3～16）

素材剥片の縁辺に、二次加工もしくは微細剥離を有する石器を一括した。

3～8は横刃形掻器で、剥片を横長に用いて上・下両辺もしくは下辺にのみ刃部を有する。3・4は上下両辺に二次加工を施し、刃部を作り出している。片面には自然面を残す。5・6は上下両端に微細剥離を有する。使用による刃こぼれと考えられる。7は縦長剥片を素材とし、下辺となる左側縁に二次加工を施して刃部を作り出している。また、上辺となる右側縁側にも微細剥離がみられるため、両刃の掻器として用いたのであろう。8は横長剥片の下辺にのみ二次加工を施し、刃部を作り出している。

9・10・11は三角形状の剥片を素材とし、側縁部を刃部とするもので、9は側縁の辺に二次加工を施し、刃部を設けている。10・11は側縁の辺に二次加工を施し、もう一辺には微細剥離を有する。

12は楕円形の剥片を用い、両側縁に二次加工を施して刃部を作り出している。また下辺部には微細剥離があり、未加工のまま使用されている。

13～15は1辺にのみ刃部を有する掻器である。13は楕円形扁平礫を素材とし、縁辺の一部に二次加工を施して刃部を作り出している。14はやや横長な剥片の末端部に二次加工を施して刃部を設けている。15は剥片の打面部に二次加工を施して刃部を作り出している。また上辺と両側縁は欠損している。

16は素材剥片の縁辺全周に二次加工を施しているため、縁辺全周が刃部となっている。

磨製石斧（17）

表面は丁寧に磨かれている。欠損後たたき石に転用されており、上下両端に敲打による割れが表裏両面に生じている。

打製石斧（18～42）

18～24は礫を素材とする石斧である。18・19は平面形が五角形を呈するもので、18は周縁調整と刃部作出を裏面側からの片面剥離により行うが、右側縁部は調整されない。それゆえ裏面と右側縁は素材礫の自然面を残す。19は裏面側からの片面剥離によって素材の周縁全てに調整を施す。裏面は素材礫の自然面を残し、先端部に調整剥離を施す。

20・21・23・24は平面形が三角形を呈するものである。20・21は素材礫の周縁を裏面側からの片面剥離により調整を施した後、両側縁部にさらに細かい調整剥離を施す。裏面は自然面をそのまま残す。23は20・21と比べ先端があまり尖らず厚さもやや薄い。裏面は自然面を残すが、刃部側に調整剥離を施す。24は裏面も剥離面で構成され自然面を残さない。周縁調整は裏面側からの片面剥離で行われ、裏面は刃部側に調整剥離を施す。

22は正面形状がおおよそ長方形を呈し、中央部がわずかに内歪する。周縁調整は裏面側からの片面剥離で行われ、裏面は自然面を残し右側縁側に調整剥離を施す。

25～42は剥片を素材とする石斧である。

25～27は両側縁が平行で、片側の側縁が下部でわずかに張り出し、刃部は直刃である。

29～33は刃部に最大幅を持つもので、このうち29・30は刃部が円刃、31・32・40は直刃、33～39は偏刃である。また29は刃部が摩滅している。

41・42は両側縁に深い抉りが入れられ、先端部と刃部は弧状を呈する。

磨石類（43～64）

磨面・凹部・敲打痕を有する石器を一括した。

43～46は磨石である。43～45は楕円礫を用い、表裏両面に磨面を有する。46は断面形状が三角形を呈する小型の円礫を用い、ほぼ全面に磨面を有する。また44は、正面中央やや下寄りに敲打痕がみられる。

47～61は凹石である。47～54は楕円礫を用い、表裏両面もしくは片面の中央に凹みを有する。表裏両面は磨かれており、磨石としても用いられている。55～61は全て片岩系変成岩を用い、表裏両面に複数の凹みを有する。56以外は全て表面が剥落しており、凹石以外の用途に用いられたかどうかは不明。

62～64は敲石である。いずれも縦長の棒状礫を用い、上下両端に敲打痕を有する。62・63は下部に敲打痕が多く、敲打による割れも生じている。62は両側縁部にも敲打痕がみられる。64は小型の棒状礫を用い、両端部と右側縁に小さな敲打痕を有する。

砥石（65）

表裏両面を使用している。また、先端部と右側縁に敲打痕を有する。破損後下部に調整を施しているため、破損後に再利用したことも考えられる。

スタンプ形石器（66・67）

2点出土。66・67ともに1度の加撃により敲打部となる平坦面を作り出している。66は側縁に調整はなされない。また敲打面の縁辺に細かい剥離が多数みられる。67は縦長の亜角礫を素材とし、両側縁は調整を施し形を整えている。

石皿（68）

1点のみ出土。表裏両面に平坦な磨面を有する。表面中央には敲打痕が見られる。

遺構外出土石器観察表（第16～20図）

番号	出土遺構	器種	長さ(m)	幅(m)	厚さ(m)	重さ(g)	石質	残存状態	備考
1	B－4	尖頭器	10.6	2.2	1.0	26.9	ホルンフェルス	先端部基部右側欠損	風化
2	表採	石鏃	1.7	1.4	0.4	0.8	黒曜石	左端部欠損	
3	SJ－13	掻器	7.8	4.0	1.3	48.1	頁岩	左側縁欠損	刃部磨耗
4	SK－1	掻器	4.6	7.6	0.6	38.2	ホルンフェルス	右側縁欠損	
5	B－4	掻器	3.4	6.3	0.5	13.3	凝灰岩	完形	
6	B－4	掻器	5.1	6.3	0.9	29.6	ホルンフェルス	左上半部欠損	
7	B－4	掻器	8.6	4.1	0.6	26.2	ホルンフェルス	右側縁欠損	
8	B－4	掻器	3.6	10.2	1.2	46.2	砂岩	完形	
9	SD－2	掻器	8.6	10.0	1.6	184.8	ホルンフェルス	完形	表面風化
10	B－4	掻器	4.1	5.95	1.1	28.1	緑色凝灰岩	左側縁上半部欠損	
11	B－4	掻器	6.6	7.1	1.8	75.1	ホルンフェルス	完形	表面風化
12	B－4	掻器	6.4	7.8	1.4	83.1	頁岩	完形	
13	SK－5	掻器	8.1	9.3	1.3	179.2	頁岩	完形	表面風化
14	表採	掻器	7.3	9.0	2.1	161.2	ホルンフェルス	完形	表面風化
15	B－4	掻器	4.8	5.8	1.2	41.7	ホルンフェルス	両側縁・上部欠損	
16	B－4	掻器	5.3	6.8	2.3	83.4	ホルンフェルス	左側縁欠損	風化
17	B－3	磨製石斧	9.9	5.7	3.8	324.3	緑色凝灰岩	完形	たたき石に転用
18	SJ－14	打製石斧	7.5	5.7	2.5	135.8	ホルンフェルス	完形	
19	SD－6	打製石斧	7.0	5.7	2.9	157.0	頁岩	完形	
20	B－5	打製石斧	9.6	6.1	3.6	265.5	ホルンフェルス	完形	
21	SK－1	打製石斧	9.2	4.8	3.1	149.2	砂岩	完形	
22	B－4	打製石斧	12.8	8.1	2.9	350.3	ホルンフェルス	完形	
23	SJ－17	打製石斧	8.6	5.2	2.5	158.9	凝灰岩	完形	表面風化・摩滅
24	B－4	打製石斧	6.5	4.4	2.3	73.2	ホルンフェルス	完形	表面風化
25	表採	打製石斧	11.6	5.1	1.5	153.2	緑色片岩	完形	
26	B－4	打製石斧	11.8	3.9	1.9	141.7	ホルンフェルス	刃部左半欠損	
27	SD－6	打製石斧	9.6	4.3	1.2	76.5	砂岩	完形	風化
28	表採	打製石斧	10.2	4.3	1.2	85.3	ホルンフェルス	先端部・刃部欠損	
29	SJ－17	打製石斧	9.9	4.3	1.2	62.0	頁岩	先端部右半・刃部左半欠損	
30	SK－1	打製石斧	9.5	4.1	1.3	76.2	凝灰岩	先端部欠損	先端部磨耗
31	表採	打製石斧	10.2	4.5	1.6	11.3	ホルンフェルス	完形	
32	B－4	打製石斧	7.7	4.4	2.0	92.8	安山岩	先端部欠損	摩滅著しい
33	B－4	打製石斧	8.4	4.9	1.3	69.1	ホルンフェルス	先端部欠損	
34	F－9	打製石斧	8.8	5.0	1.5	83.4	泥岩	先端部欠損	
35	B－4	打製石斧	9.0	4.5	1.0	54.5	結晶片岩	完形	
36	SJ－17	打製石斧	7.8	3.8	1.3	44.9	ホルンフェルス	先端部左半欠損	風化著しい
37	SK－3	打製石斧	10.0	5.4	1.6	83.2	ホルンフェルス	完形	
38	B－4	打製石斧	9.2	4.5	1.1	68.3	緑色片岩	完形	
39	B－5	打製石斧	8.3	3.9	0.8	34.0	曹質ホルンフェルス	完形	摩滅著しい
40	SD－8	打製石斧	8.4	6.5	0.9	66.3	結晶片岩	先端部欠損	
41	SD－2	打製石斧	16.5	8.4	3.1	474.3	砂岩	刃部欠損	
42	SJ－25	打製石斧	13.1	8.4	2.3	276.1	ホルンフェルス	刃部欠損	
43	B－4	磨石	10.2	4.4	7.6	413.2	砂岩	破片	
44	SJ－12	磨石	10.5	4.4	6.7	367.7	安山岩	破片	
45	B－4	磨石	8.1	3.9	6.3	269.5	安山岩	破片	
46	SJ－21	磨石	4.4	3.0	4.2	79.3	安山岩	完形	
47	SJ21	凹石	10.3	4.1	8.3	503.6	安山岩	完形	
48	B－6	凹石	9.9	1.55	6.6	160.0	網雲母片岩	完形	
49	SD－9	凹石	10.9	3.2	5.4	263.4	緑色片岩	破片	
50	B－4	凹石	9.9	3.5	6.9	381.4	安山岩	破片	
51	SJ4	凹石	8.2	3.1	9.4	323.8	安山岩	破片	
52	B－4	凹石	7.8	3.1	6.9	217.8	安山岩	破片	
53	B－4	凹石	5.0	3.5	8.0	149.8	安山岩	破片	
54	SJ－17	凹石	5.0	3.5	7.9	178.5	閃緑岩	破片	
55	B－4	凹石	14.9	3.5	8.5	425.3	片岩	破片	
56	B－4	凹石	18.7	4.4	10.6	878.3	結晶片岩	破片	
57	E－7	凹石	10.4	2.8	5.8	152.8	網雲母片岩	破片	
58	SK－1	凹石	8.7	2.8	5.4	156.2	網雲母片岩	破片	
59	SD－2	凹石	9.3	2.0	8.3	182.8	網雲母片岩	破片	
60	SJ－17	凹石	10.8	2.2	8.1	262.3	網雲母片岩	破片	
61	B－4	凹石	6.8	2.0	5.9	94.1	網雲母片岩	破片	
62	B－4	敲石	12.7	4.9	3.0	214	頁岩	完形	
63	SJ－6	敲石	10.9	3.1	1.7	67.8	頁岩系変成岩	完形	
64	B－4	敲石	7.6	2.5	1.1	31.6	砂岩	完形	
65	B－4	砥石	9.1	5.7	2.0	116.3	砂岩	下部左側欠損	
66	SJ－12	スタンプ形石器	12.4	7.4	5.8	630.9	砂岩	完形	
67	B－4	スタンプ形石器	13.3	9.2	5.2	738.7	砂岩	完形	
68	SJ－18	石皿	16.2	2.5	14.6	1013.2	緑泥片岩	縁辺の一部剥落	

2．奈良・平安時代

（1） 住居跡

第１・９号住居跡（第21～23図）

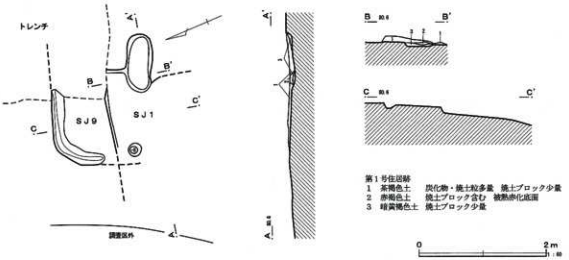
Ｂ－１グリッドに位置する。斜面部で検出されたために、土砂の流出と表土化の進行が著しい。

ＳＪ１は、カマド周辺部だけをわずかにのこす。ＳＪ９は、壁溝だけが残存しており、ＳＪ１とは別の住居跡と判断した。両者の切り合い関係は不明である。

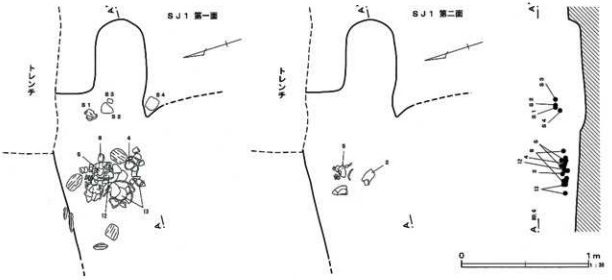
カマドを主軸とする方位はＮ－101°－Ｅを測る。

カマド内の底面は、よく焼けていて焼土化していた。カマドとその周辺部からは片岩が数点出土し、片側が被熱してよく焼けていた。これらの片岩は、袖石などのカマドの補強材として使用されたものとかんがえられる。

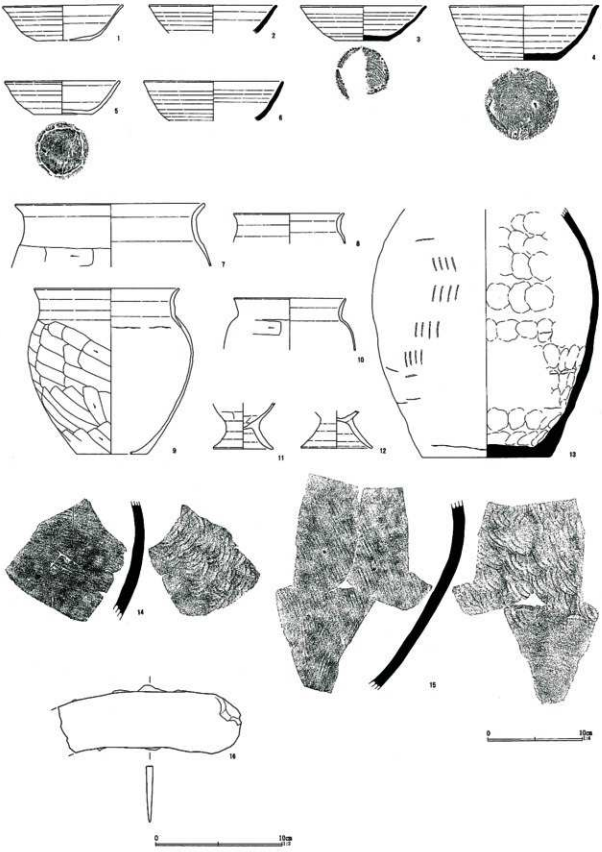
カマド前方には、炭化材とともに多数の遺物の集中をみた。この遺物集中部からは、須恵器の坏、大甕の破片、土師器の甕、台付甕の他、鉄鎌が出土している。



第21図　第１・９号住居跡



第22図　第１号住居跡遺物分布図



第23図　第１号住居跡出土遺物

第１号住居跡出土遺物観察表（第23図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	坏	ＨＳ	(12.7)	3.7	5.6	ABCEG	不良	橙	40	南比企窯	5-1
2	坏	S	(13.5)	(3.0)	－	ACH	不良	灰黄	25	南比企窯	
3	坏	S	(13.4)	3.7	5.7	AH	良好	灰	20	南比企窯	
4	椀	S	15.8	5.8	7.6	ACH	良好	灰	85	南比企窯	5-2
5	高台付坏	ＨＳ	12.2	3.5	6.2	ACEI	不良	にぶい橙	100	南比企窯	5-3
6	坏	S	(14.7)	(4.2)	(9.8)	ACH	良好	灰白	25	南比企窯	
7	甕	H	(20.0)	(6.6)	－	ACE	不良	橙	50	大里の低地	
8	甕	H	(11.8)	(3.2)	－	ABCE	不良	明赤褐	60	大里の低地	7-8
9	甕	H	(15.4)	17.5	(7.4)	ABCE	普通	明赤褐	50	大里の低地	8-1
10	甕	H	(11.8)	(5.4)	－	AC	不良	にぶい黄	破片	江南台地の細かいローム	8-2
11	台付甕	H	－	(4.8)	(6.3)	ACG	不良	明赤褐	75	江南台地の粗いローム	
12	台付甕	H	－	(4.0)	(7.5)	ACE	不良	橙	50	江南台地の細かいローム	
13	甕	S	－	(26.0)	13.5	AGH	良好	灰オリーブ	50	南比企窯	8-3
14	甕	S	－	－	－	ACD	良好	灰	破片	南比企窯　15と同一個体	
15	甕	S	－	－	－	ACD	良好	黒灰	破片	南比企窯	
16	鎌	現存長14.6㎝　幅4.9㎝　厚さ0.5㎝　重量104.28g								鉄製	9-5

第４・34号住居跡（第24・25図）

Ｄ－３グリッドに位置する。遺構確認時には１軒の住居跡を想定して精査したが、斜面上部と下部では床面の標高に差があり、住居跡の規模が１軒にしては大きすぎることや、東側壁面のライン中央付近でくびれがみられることなどの理由から、２軒の住居跡が重複したものとかんがえられる。当初の精査時点で掘りぬいてしまったものの、ＳＪ34の北壁中央付近で焼土層の集中がみられたため、この部分にＳＪ34のカマドが、ＳＪ４の覆土を切ってのこっていたものとおもわれる。したがって、新旧関係はＳＪ34がＳＪ４を切って構築されたと判断する。

ＳＪ４は、斜面上部の北側にカマドがのびる。カマドの底面と壁面は、よく焼けていて焼土化が著しい。覆土には煙道の天井部の崩落土が明瞭にみられた。カマドの主軸方位はＮ－２°―Ｅを測る。床面の深さは斜面上部から最も深い部分で26㎝を測る。カマドの東側で壁にそって浅い周溝の痕跡がみられる。ピットや貯蔵穴などの付属遺構は検出されなかった。

ＳＪ34は、床面の深さ７㎝を測る。南側は土砂の流出のために、のこっていない。北壁側にカマドが取り付いていたものとおもわれる。床面上から小ピットや土壙状の掘りこみが検出されたが、結果的には掘り方だったものとおもわれる。

出土遺物は、ＳＪ４から須恵器坏の他，カマド内から刀子が出土した。

第５号住居跡（第26・27図）

Ｄ－４グリッドに位置する。西区の斜面部から検出された。斜面上部にわずかにカマド周辺部と北壁部分がのこる。東西幅3.2ｍ、床面の深さ14㎝を測る。カマドは北壁側に取り付き、主軸方位はＮ―９°―Ｅを測る。住居跡の両隅部に貯蔵穴とおもわれる浅い掘りこみが検出された。その他に、床面上に小ピットが検出されたが、この遺構にともなうものかどうかは不明である。

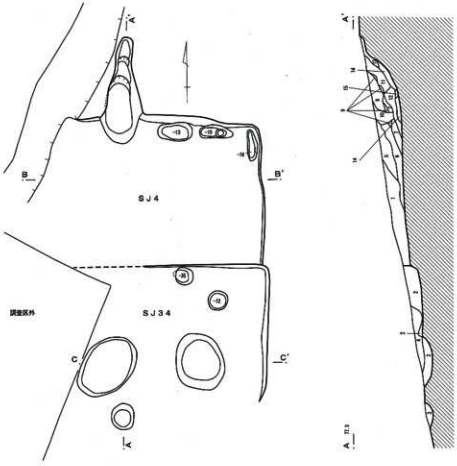
出土遺物は、土師器坏、蓋の出土をみた。

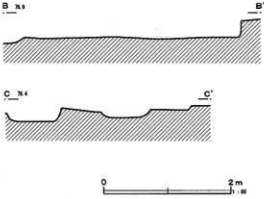
第７号住居跡（第26図）

Ｄ－４グリッドに位置する。ＳＪ５に近接して検出されていて、本来ならばＳＪ５と重複していた住居跡である。土砂流出によってカマドの基底面がわずかに遺存していたため、住居跡と判断した。

カマドは主軸方位を北西にとり、Ｎ－55°―Ｗを測るものとおもわれる。小ピットが検出されたが、遺構にともなうものかどうかは不明である。

遺物は小破片のみで、図示できるものはなかった。





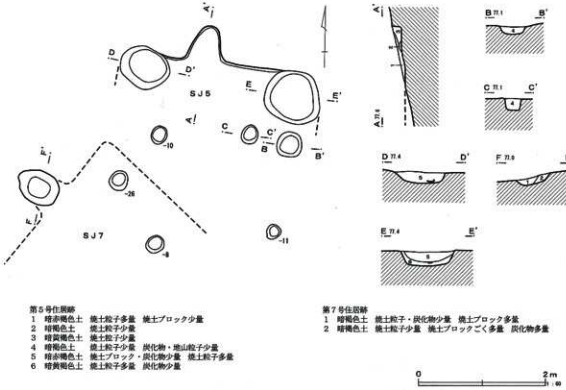
第4・34号住居跡
1　暗褐色土　焼土粒子・炭化物多量　ローム粒子少量
2　暗黄褐色土　焼土粒子・ローム粒子少量
3　赤褐色土　焼土ブロック多量　床面に貼りつくように堆積
4　暗褐色土　地山ブロック・焼土粒子少量
5　暗黄褐色土　地山粒子多量　焼土粒子少量
6　暗黄褐色土　地山粒子・焼土粒子多量
7　暗黄褐色土　地山粒子・焼土粒子多量　焼土ブロック少量
8　暗黄褐色土　地山粒子多量　焼土ブロック少量　焼道天井部
9　赤褐色土　焼道天井部壁面で被熱赤化部分　またはカマド天井崩落土
10　暗褐色土　焼土粒子多量　炭化物少量　カマド本体部分か?
11　暗赤褐色土　焼土粒子多量　地山粒子少量　焼道底分堆土
12　暗赤褐色土　焼土ブロック・焼土粒子多量　地山粒子・炭化物少量
13　暗赤褐色土　焼土粒子少量
14　黄褐色土　焼土ブロック・炭化物少量　地山ブロック多量
15　黒褐色土　焼土ブロック少量　炭化物多量
※2～4はSJ34の覆土
※1～10は焼道部からの流れ込みによる堆土

第24図　第4・34号住居跡

第25図　第4号住居跡出土遺物

第４号住居跡出土遺物観察表（第25図）

番号	器　種	種別	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考	写真図版
1	坏	S	(12.4)	4.0	7.5	AG	良好	青灰	25	南比企窯	
2	刀子	現存長9.8cm　幅4.9cm　厚さ2.5cm　重量17.35g								鉄製	9-6



第５号住居跡
1　暗赤褐色土　焼土粒子多量　焼土ブロック少量
2　暗褐色土　焼土粒子少量
3　暗黄褐色土　焼土粒子少量
4　暗褐色土　焼土粒子少量　炭化物・地山粒子少量
5　暗赤褐色土　焼土ブロック・炭化物少量　焼土粒子多量
6　暗黄褐色土　焼土粒子多量　炭化物少量

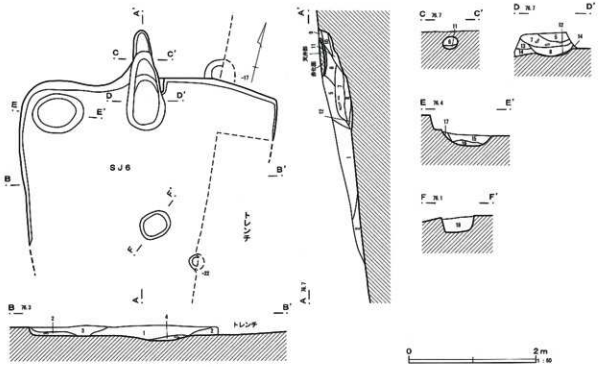
第７号住居跡
1　暗褐色土　焼土粒子・炭化物少量　焼土ブロック多量
2　暗褐色土　焼土粒子少量　焼土ブロックごく多量　炭化物多量

第26図　第５・７号住居跡

第27図　第５号住居跡出土遺物

第５号住居跡出土遺物観察表（第27図）

番号	器　種	種別	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考	写真図版
1	坏	H	12.4	3.9	—	ABCEG	不良	にぶい橙	90	大里の低地　貯蔵穴	5-4
2	蓋	H S	(20.0)	(2.0)	—	ACE	普通	にぶい黄橙	破片	南比企窯　貯蔵穴	
3	坏	H	(6.0)	(1.8)	—	ABEG	普通	明赤褐	破片	比企・入間のローム土　赤彩	



第6号住居跡
1 暗褐色土　地山粒子・炭化物・焼土粒子少量
2 暗褐色土　地山粒子多量　炭化物・焼土粒子ごく微量
3 暗褐色土　地山粒子多量　炭化物・焼土粒子・焼土ブロック少量
4 暗褐色土　地山粒子・焼土ブロック多量　張り方か?
5 暗褐色土　焼土粒子・炭化物・焼土ブロック少量
6 暗褐色土　焼土粒子・焼土ブロック少量
7 暗褐色土　焼土粒子少量　焼土ブロック多量
8 暗赤褐色土　焼土ブロックごく多量
9 暗褐色土　焼土粒子・炭化物少量
10 暗褐色土　焼土粒子・炭化物少量　焼土ブロック多量
11 暗赤褐色土　焼土ブロック多量　廃絶時使用面
12 暗灰色土　焼土粒・炭化物・地山粒子少量
13 暗褐色土　焼土粒・炭化物・地山粒子少量
14 暗褐色土　地山粒子多量　地山ブロック少量
15 暗褐色土　焼土粒子・地山粒子・炭化物・地山ブロック少量
16 暗黄褐色土　焼土ブロック少量　地山粒子・地山ブロック多量
17 暗黄褐色土　地山粒子・地山ブロック多量
18 暗黄褐色土　焼土粒子・地山粒子・炭化物・地山ブロック少量

第28図　第6号住居跡

第6号住居跡（第28～30図）

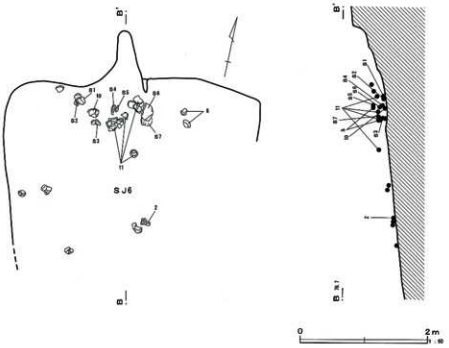
D－5グリッドに位置する。西区の斜面部から検出された。東側に試掘トレンチがかかり、斜面下部の南側が流出しているが、ほぼ全容を把握できる状態で検出された。カマドを軸とする主軸長は現存で2.54m、東西幅4.04m、床面の深さ22cmである。主軸方位はN－12°－Wを測る。

北壁中央にとりつくカマドには、片岩による袖石などの補強材が検出された。これらの片岩は、カマド前方部から7点が検出され、いずれも被熱赤化していた。

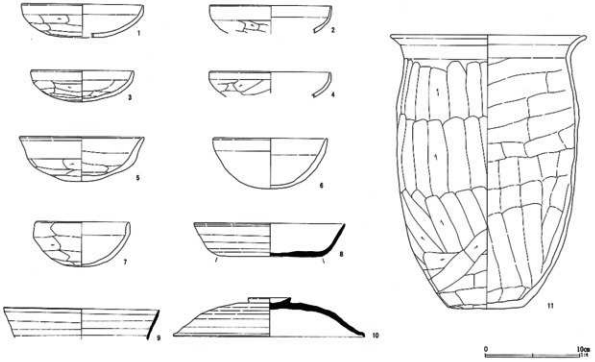
カマドの煙道部は、天井部が崩落せずにトンネル状に遺存しており、カマドの底面と壁部は被熱焼土化が著しい。遺物はカマド前方を中心に長胴甕、坏が出土した。

貯蔵穴は北西隅から検出された。その他、床面中央からは浅い掘りこみと小ピットが検出されたが、性格は不明である。また、北壁にかかって東よりにピット状の掘りこみが検出され、覆土内から多量の焼土が検出された。ＳＪ６にともなう遺構かどうかは不明である。

遺物はカマド周辺だけでなく、覆土全体から出土している。土師器坏、長胴甕、須恵器の坏、蓋などがみられる。



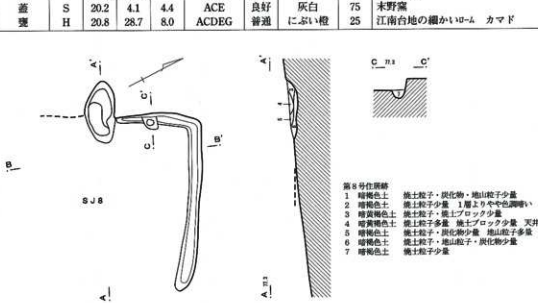
第29図　第６号住居跡遺物分布図



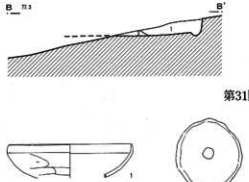
第30図　第６号住居跡出土遺物

第６号住居跡出土遺物観察表（第30図）

番号	器　種	種別	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考	写真図版
1	坏	H	(13.0)	(3.5)	－	ABCEG	不良	にぶい橙	40	大里の低地	
2	坏	H	(12.8)	(2.9)	－	ABCG	普通	橙	破片	大里の低地	
3	坏	H	(11.0)	3.3	－	ABCEG	普通	にぶい橙	30	大里の低地	
4	坏	H	(13.0)	(2.3)	－	ABG	普通	橙	20	大里の低地　貯蔵穴	
5	坏	H	(13.2)	4.7	－	ACEF	普通	橙	25	江南台地の粗いローム	
6	椀	H	12.1	5.3	－	A	不良	橙	80	江南台地の粗いローム	5-5
7	椀	H	10.0	4.7	－	ABCG	普通	橙	80	江南台地の粗いローム	5-6
8	坏	S	16.0	3.5	11.0	ABCEG	不良	灰黄	50	南比企窯	5-7
9	坏	S	(16.6)	(3.2)	－	ACG	良好	灰白	20	南比企窯	
10	蓋	S	20.2	4.1	4.4	ACE	良好	灰白	75	末野窯	7-6
11	甕	H	20.8	28.7	8.0	ACDEG	普通	にぶい橙	25	江南台地の細かいローム　カマド	8-4



第31図　第８号住居跡



第32図　第８号住居跡出土遺物

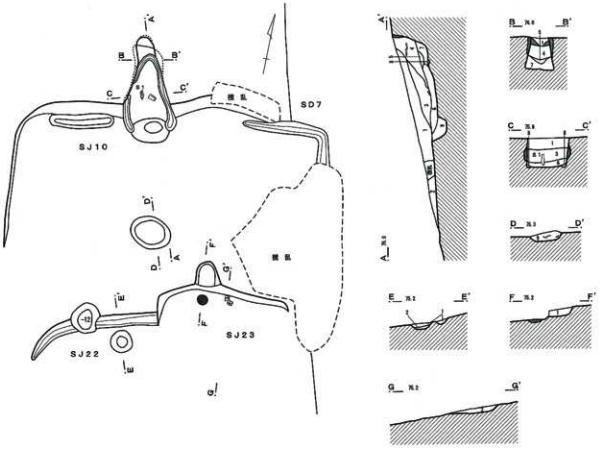
第８号住居跡（第31・32図）

Ｄ－５グリッドに位置する。カマドの掘りこみと北壁部がわずかに遺存する。カマドのわきから現存する壁にそって壁溝がめぐる。カマドの主軸方位はＮ－66°－Ｗを測る。深さは北壁部分で20cmを測る。

土師器坏、土製紡錘車が出土した。

第８号住居跡出土遺物観察表（第32図）

番号	器　種	種別	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考	写真図版
1	坏	H	13.1	(3.6)	－	ABC	不良	橙	破片	大里の低地　貯蔵穴	
2	紡錘車	H	3.4	1.6	2.5	BCEH	普通	にぶい黄橙	100	土製　カマド	9-3



第33図　第10・22・23号住居跡

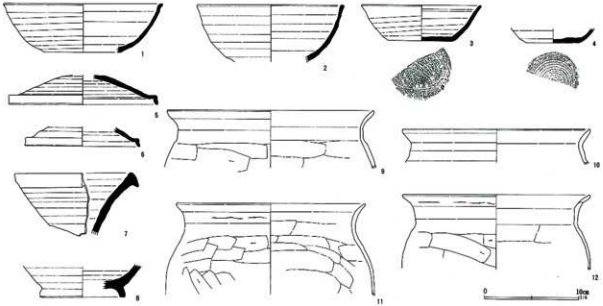
第10・22・23号住居跡（第33・34図）

D－6・E－6グリッドに位置する。ＳＪ10は東側に撹乱をうけ、ＳＤ6・7に切られる。南側はＳＪ22・23と重複するが、土砂流出のため、新旧は不明である。

ＳＪ10は、北壁にカマドがとりつき、一部壁溝がみられる。カマド内は壁部と底部で被熱焼土化が著しい。カマドの壁にそって底部に浅い溝状の掘りこみが検出された。片岩によるカマド補強材の掘り方とおもわれる。カマド内からは長さ12㎝、幅８㎝、厚さ３㎝で両面被熱した片岩が１点検出された。カマドの主軸方位はN－12°—Wを測る。東西幅4.9ｍ、床面の深さ20㎝を測る。

ＳＪ22は壁溝が、ＳＪ23はカマド周辺部がわずかに遺存する。カマドの主軸方位はN－13°—Wを測る。

ＳＪ10から須恵器の椀、坏、蓋、台付甕、土師器甕が出土した。



第34図　第10号住居跡出土遺物

第10号住居跡出土遺物観察表（第34図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	椀	S	(16.8)	(5.2)	(8.3)	ACH	良好	灰	20	南比企窯　カマド	
2	椀	S	(15.4)	-	—	AC	良好	灰	20	南比企窯　カマド	
3	坏	S	12.7	3.7	6.7	ACH	良好	灰白	50	南比企窯	5-8
4	坏	S	—	(1.5)	5.5	ACH	良好	灰	40	南比企窯	
5	蓋	S	15.6	(3.1)	—	ACH	良好	灰	25	南比企窯　貼床	
6	蓋	S	(12.0)	(2.0)	—	ACGH	良好	灰	20	南比企窯　カマド	
7	甕	S	(40.0)	-	—	ACHI	良好	灰	破片	南比企窯　カマド	
8	台付甕	S	—	(3.2)	(8.8)	AC	良好	灰	20	南比企窯	
9	甕	H	(21.9)	(6.0)	—	ABCE	普通	橙	20	大里の低地	
10	甕	H	(20.0)	(3.6)	—	ABCEG	普通	にぶい橙	破片	大里の低地　カマド	
11	甕	H	(20.0)	(9.6)	—	ABCEG	普通	にぶい赤褐	30	大里の低地	
12	甕	H	(20.0)	(7.9)	—	ABCEG	普通	にぶい赤褐	20	大里の低地　カマド	

第11号住居跡（第35図）

F−16グリッドに位置する。東区の斜面部に立地する。カマドと北壁、東側壁溝がのこるが、床面はほとんどが流出している。

カマドは北壁にとりつき、煙道部は段差をともなってのびる。壁面は焼土化が著しく、覆土には天井部の崩落土がみられる。片岩などのカマドの補強材は検出されなかった。

カマドの主軸方位はN−28°—Wを測る。東西幅3.3m、床面の深さ20cmを測る。貯蔵穴は検出されなかった。

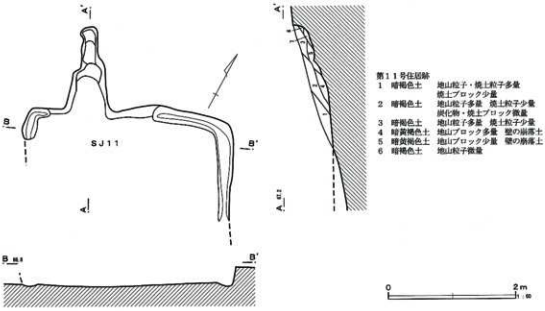
出土遺物は破片が数点のみで、図示できる遺物はなかった。

第12号住居跡（第36・37図）

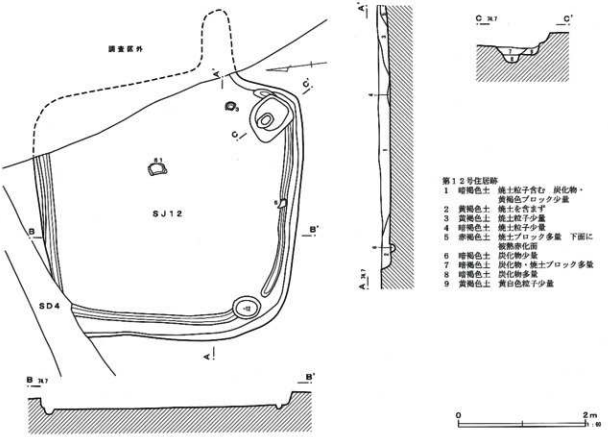
A−17グリッドに位置する。東区の尾根上の平坦部に立地するため、土砂流出から免れる。東側が調査区外にかかっており、北西隅部をＳＤ４に切られるが、遺構の規模を把握できる数少ない住居跡のひとつである。南北幅4.3m、東西幅4.1m、床面の深さ16cmを測る。

カマドは東壁にとりつくとかんがえられ、カマド前方部とおもわれる床面上からは、焼土の検出が目立った。壁溝はほぼ全周するものとおもわれる。南東隅部から貯蔵穴が検出された。

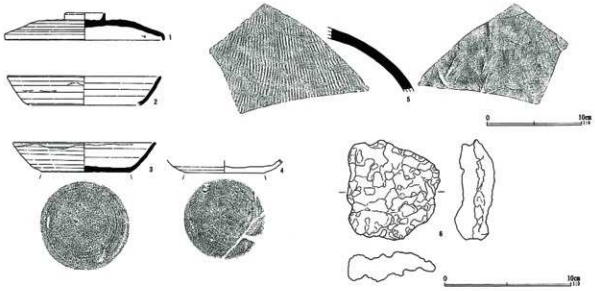
床面上のほぼ中央部から、長さ28cm、幅17cm、厚さ4.4cmの結晶片岩が出土した。この片石は、片面



第35図　第11号住居跡



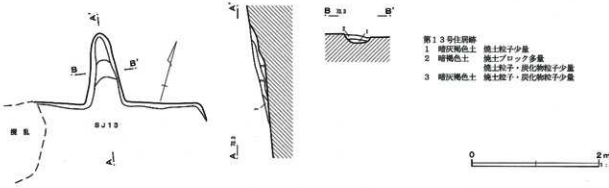
第36図　第12号住居跡



第37図　第12号住居跡出土遺物

第12号住居跡出土遺物観察表（第37図）

番号	器　種	種別	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考	写真図版
1	蓋	S	17.0	2.9	4.3	ACG	良好	灰	50	南比企窯　転用硯	7-7
2	坏	S	(16.3)	(3.1)	(11.4)	A	良好	灰	25	南比企窯	
3	坏	S	15.1	3.1	9.3	CH	良好	にぶい橙	85	南比企窯	6-1
4	椀	HS	—	(1.3)	8.4	ACH	普通	浅黄橙	80	南比企窯　貼床	
5	甕	S	—	—	—	AG	良好	灰オリーブ	破片	南比企窯	
6	鉄滓	長さ8.0cm　幅7.4cm　厚さ2.0cm　重量136.08g									10-1



第38図　第13号住居跡

が被熱赤化しており、カマドの補強材に使用されたものとおもわれる。

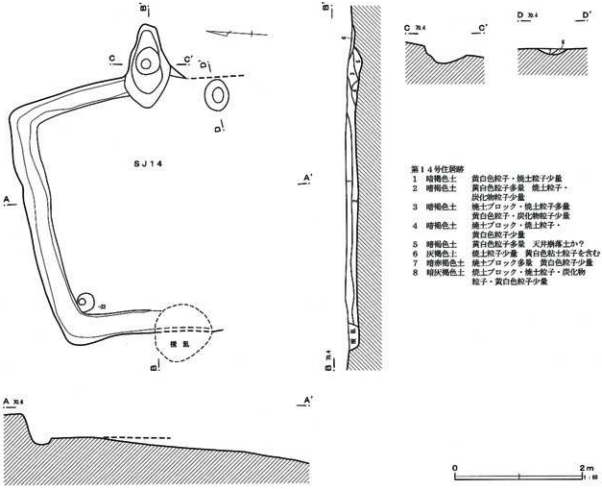
遺物は須恵器の蓋、坏、甕などの他、鉄滓が出土している。

第13号住居跡（第38図）

C－15グリッドに位置する。東区の斜面部に立地する。カマドと北壁、北東隅部がわずかにのこる。西側には攪乱をうけているため、北壁の長さも不明である。

カマドは北壁にとりつき、底面は段差をもってのびている。覆土からは焼土が少量検出された程度である。片岩などの補強材は検出されなかった。カマドの主軸方位はN－21°－Wを測る。

出土遺物は細片のみで、図示できるものはない。



第39図　第14号住居跡

第14号住居跡（第39・40図）

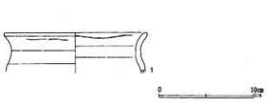
D−15・E−15グリッドに位置する。東区の斜面部に立地する。斜面上部の北側は遺存するが、床面は、半分以上が土砂流出してのこらない。

カマドは東壁にとりつき、北壁から張り出した側に主体部の底面がやや浅くくぼむ。煙道部は短くのびるため、本来は全周していたものとおもわれる。

北側半分の壁にそって、比較的幅広の壁溝がめぐる。カマドの南脇で浅い掘りこみが検出された。貯蔵穴の痕跡であろうか。この他、北西隅部で小ピットが検出されたが、性格は不明である。

主軸方位はN−84°—Eを測る。主軸長4.0m、床面の深さ36cmを測る。

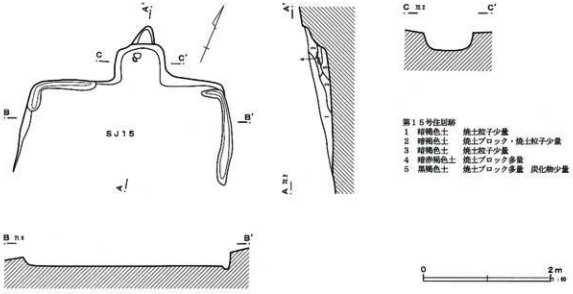
出土遺物で図示できるものは、小型の土師器甕1点のみである。



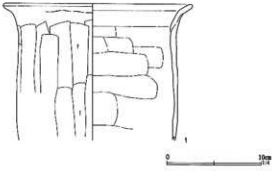
第40図　第14号住居跡出土遺物

第14号住居跡出土遺物観察表（第40図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	甕	H	(15.3)	(4.3)	—	AEG	不良	明赤褐	30	大里の低地	



第41図　第15号住居跡



第42図　第15号住居跡出土遺物

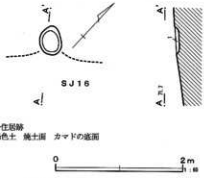
第15号住居跡（第41・42図）

C−17グリッドに位置する。東区の斜面部に立地するため、南側半分が土砂流出する。北壁にカマドがのびる。北壁と東壁に壁溝がみられる。貯蔵穴は検出されなかった。

主軸方位はN−14°−Wを測る。東西幅3.3m、床面の深さ12cmを測る。出土遺物で図示できるものは、長胴甕１点のみである。

第15号住居跡出土遺物観察表（第42図）

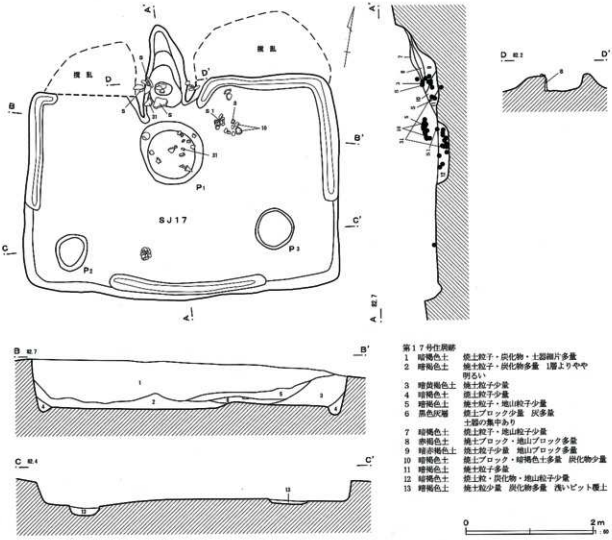
番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	甕	H	(19.8)	(14.3)	−	CE	普通	明赤褐	25	大里の低地　カマド	



第43図　第16号住居跡

第16号住居跡（第43図）

C−16グリッドに位置する。カマドの基底面がわずかにのこるため、住居跡の痕跡と判断した。北西方向にカマドがのびる。ピットや貯蔵穴なども、周辺部からは検出されなかった。



第44図　第17号住居跡

第17号住居跡（第44～46図）

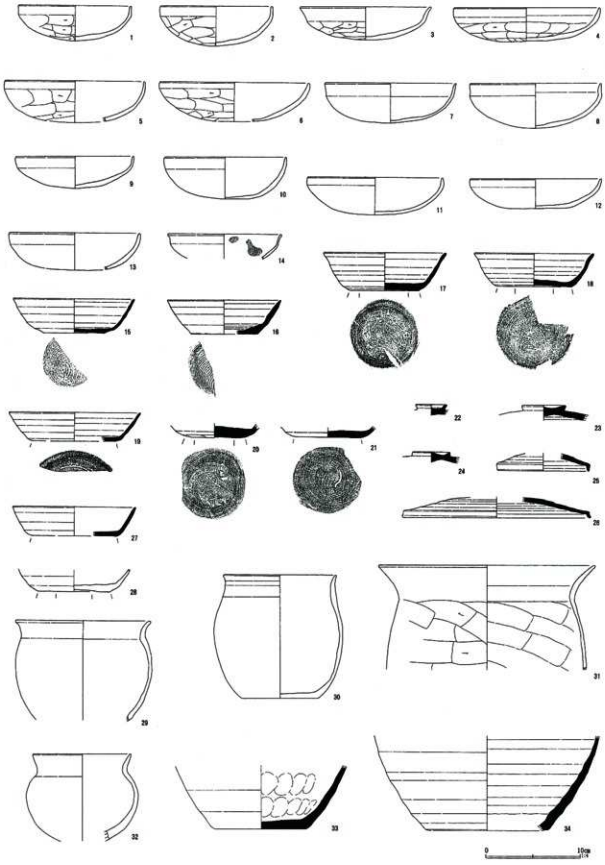
A－4・5グリッドに位置する。西区の尾根線上の平坦面に立地する。北壁のカマド両脇に攪乱をうけるが、全容を把握できる住居跡である。住居の掘りこみも最も深く、このためか、覆土内からの出土遺物は最も多い。

遺構の規模は、主軸長3.5m、東西幅5.0m、床面の深さ75cmを測る。

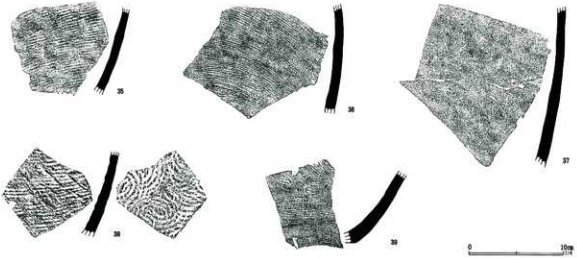
カマドは北壁中央のやや西寄りにとりつく。北壁から張り出して主体部があり、カマドの底面と壁面は焼土化が著しい。カマド内には補強材とみられる片岩が散在しており、東側袖部には片岩による袖石がのこっていた。

壁溝は四辺にめぐる。床面にはの3ヶ所に浅いくぼみがみられる。このうちP2・P3は、置き柱の痕跡であろうか。

遺物はカマド内から周辺部にかけて出土し、カマド前方部の土壙状の掘りこみからも多くの遺物が出土した。覆土中からのものを含めると、住居跡の中では最も多くの遺物を出土した。土師器坏、甕、小型の甕や壺、須恵器では坏、蓋、甕、甑などが出土している。



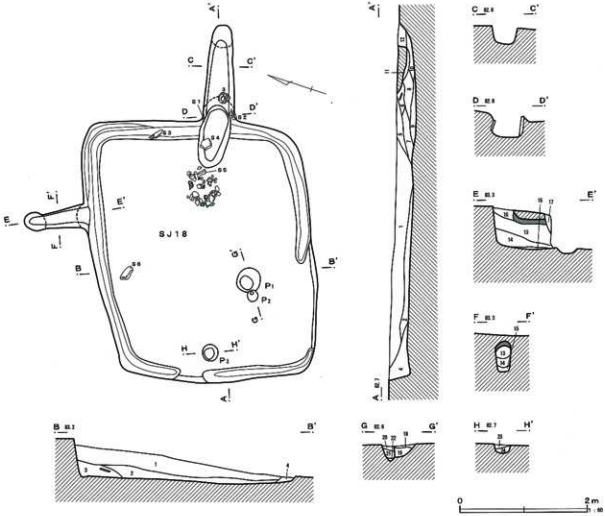
第45図　第17号住居跡出土遺物（1）



第46図　第17号住居跡出土遺物（2）

第17号住居跡出土遺物観察表（第45・46図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	坏	H	(15.0)	(3.7)	－	ACE	普通	黄灰	25	大里の低地　下層	
2	坏	H	(12.0)	(4.2)	－	ACE	普通	橙	30	江南台地の細かいローム	
3	坏	H	(14.0)	(3.5)	－	CE	普通	にぶい橙	50	大里の低地　カマド	6-2
4	坏	H	15.6	3.6	2.6	ACEG	普通	にぶい黄橙	85	大里の低地　下層	6-3
5	坏	H	(15.0)	(4.4)	－	ABCE	普通	橙	20	江南台地の粗いローム	
6	坏	H	(16.0)	(4.1)	－	ACE	不良	にぶい橙	25	江南台地の細かいローム	
7	坏	H	(13.8)	4.2	－	AEG	不良	橙	50	大里の低地	6-4
8	坏	H	14.0	4.7	－	AEG	不良	橙	60	大里の低地	6-5
9	坏	H	(12.5)	(3.4)	－	E	不良	橙	30	江南台地の細かいローム　下層	
10	坏	H	13.0	4.5	－	ACEG	不良	橙	60	江南台地の細かいローム	6-6
11	坏	H	(14.2)	(4.0)	－	ACEG	普通	橙	50	江南台地の細かいローム	
12	坏	H	(14.0)	(3.1)	－	ACE	普通	橙	40	大里の低地	
13	坏	H	(14.0)	(3.9)	－	AE	不良	橙	20	江南台地の細かいローム	
14	坏	H	(12.1)	－	－	ABE	普通	橙	破片	大里の低地、油煙付着	
15	坏	S	(12.8)	3.6	5.4	ACH	良好	灰	25	南比企窯	
16	坏	S	12.0	3.6	7.0	AGH	良好	灰白	50	南比企窯	6-7
17	坏	S	(12.8)	(4.0)	7.3	ACDFH	良好	灰白	40	南比企窯	
18	坏	S	(12.6)	3.5	7.9	AC	良好	灰白	25	南比企窯	
19	坏	S	(14.0)	(3.0)	(8.8)	ACE	良好	にぶい褐	20	南比企窯	
20	坏	S	－	(1.5)	7.0	ACD	良好	灰白	80	南比企窯 底部に工具痕	
21	坏	S	－	(1.0)	7.0	BCH	良好	灰	80	南比企窯	
22	蓋	S	－	(1.1)	3.3	AD	良好	灰	95	南比企窯	
23	蓋	S	－	(1.7)	4.7	AB	普通	灰白	40	末野窯	
24	蓋	S	－	(1.1)	4.0	ACDG	不良	明黄褐	90	江南台地の粗いローム	
25	蓋	S	9.6	(1.9)	－	AH	良好	灰	25	南比企窯	
26	蓋	S	20.0	(2.2)	－	ABC	良好	暗灰	20	南比企窯	
27	坏	S	(13.0)	3.0	(9.0)	ABCEG	普通	にぶい黄橙	20	南比企窯	
28	坏	HS	－	(2.3)	7.5	ABCEH	不良	橙	75	南比企窯	
29	小形甕	H	14.2	(10.6)	－	ACEG	不良	橙	95	江南台地の細かいローム　下層	8-5
30	小形甕	H	11.9	13.0	8.0	ACEG	不良	橙	90	江南台地の粗いローム	8-6
31	甕	H	(23.0)	(11.0)	－	ACDEGI	普通	橙	20	大里の低地	
32	小形壺	H	(11.3)	(9.2)	－	AEFI	不良	にぶい褐	20	江南台地の粗いローム　下層	
33	甕	S	－	(7.0)	10.0	ACH	良好	灰	50	南比企窯	
34	甑	S	－	(10.0)	(13.0)	ACDH	良好	灰	25	南比企窯	
35	甕	S	－	－	－	ACD	良好	灰	破片	末野窯	
36	甕	S	－	－	－	ACDH	良好	灰白	破片	南比企窯　カマド	
37	甕	S	－	－	－	ACDH	良好	灰	破片	末野窯	
38	甕	S	－	－	－	ACG	良好	灰	破片	末野窯	
39	甑	S	－	－	－	ADG	良好	灰白	破片	南比企窯	



第１８号住居跡

1	暗褐色土	焼土粒子・炭化物・地山粒子少量
2	暗褐色土	焼土粒子・地山粒子多量
3	暗褐色土	地山粒子・地山ブロック多量
4	暗褐色土	地山粒子少量　1層より色調明い
5	暗褐色土	焼土粒子・焼土ブロック少量　地山粒子多量
6	暗褐色土	焼土粒子少量　焼土ブロック・地山粒子多量　天井部崩落土
7	暗褐色土	焼土粒子・地山ブロック少量焼土ブロック・地山粒子多量
8	暗褐色土	焼土粒子・地山粒子・地山ブロック多量
9	褐色土	焼土粒子少量　地山粒子多量　掘り方
10	褐色土	焼土粒子少量　地山粒子多量
11	赤褐色土	焼土ブロック多量　天井赤色部崩落土
12	暗褐色土	焼土粒子・地山粒子多量
13	暗褐色土	焼土粒子・炭化物・地山ブロック少量　地山粒子多量
14	暗褐色土	焼土粒子・地山粒子多量　焼土ブロック・地山ブロック少量
15	明灰褐色土	焼土粒子・焼土ブロック・地山粒子多量　炭層
16	暗褐色土	炭化物・地山粒子少量
17	暗褐色土	地山粒子多量　壁面として貼った土
18	暗赤褐色土	焼土粒子・焼土ブロック・地山粒子多量
19	暗褐色土	地山粒・地山ブロック多量　焼土ブロック少量
20	暗黄褐色土	焼土粒子・地山ブロック多量
21	暗褐色土	地山粒子多量　地山ブロック少量
22	黒褐色土	地山ブロック
23	暗褐色土	地山粒子多量　地山ブロック少量
24	暗黄褐色土	地山粒子・地山ブロック多量

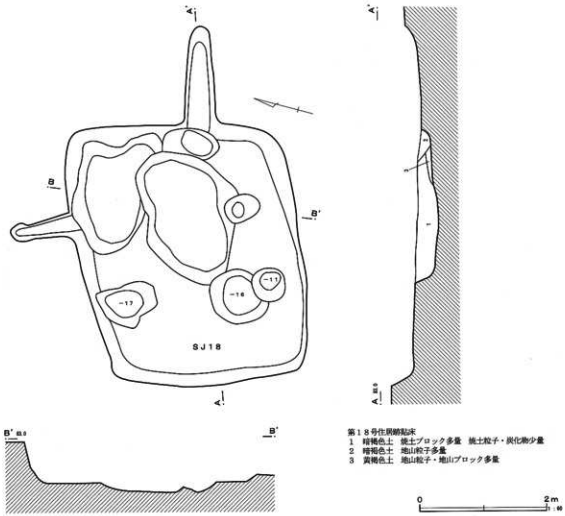
第47図　第18号住居跡

第18号住居跡（第47～49図）

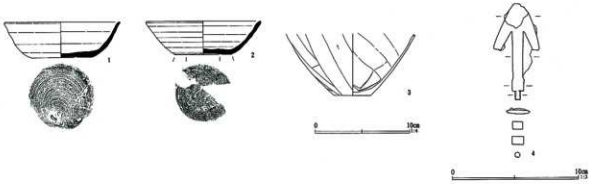
AZ－５・A－５グリッドに位置する。ＳＪ17に近接した西区の尾根線上の平坦部に立地する。今回調査の遺構の中で最も遺存状態の良い住居跡である。

遺構の規模は、南北幅3.5ｍ、東西幅4.1ｍ、床面の深さ58cmを測る。

カマドは東壁と北壁の２ヶ所にとりつく。両者とも煙道部の天井が崩落せずにトンネル状にのこり、底面と壁面の被熱焼土化が顕著である。北壁にとりつくカマド内には遺物は特にみられなかったが、東壁のカマドには壁面両側に片岩による補強材（Ｓ１・Ｓ２）がのこり、長胴甕の胴下部（第49図３）



第48図　第18号住居跡掘り方



第49図　第18号住居跡出土遺物

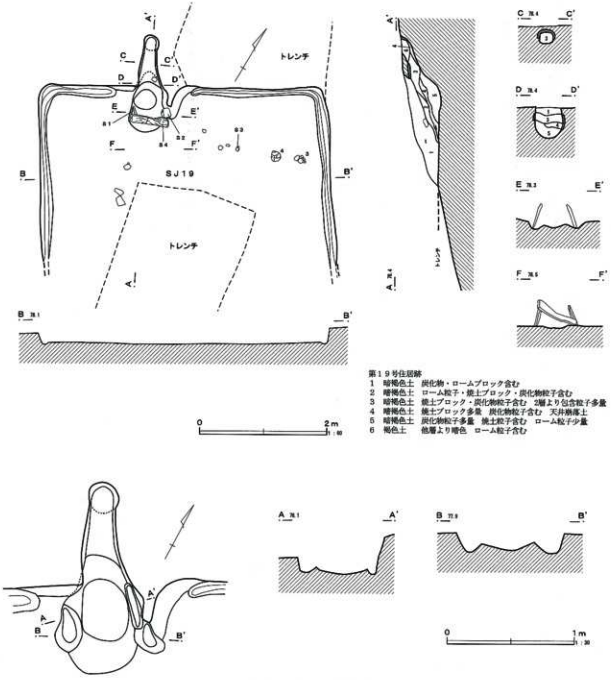
第18号住居跡出土遺物観察表（第49図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	坏	S	(12.3)	(3.8)	6.4	AH	良好	灰	25	南比企窯　カマド	
2	坏	S	(12.2)	(3.5)	6.0	ACH	良好	灰	25	南比企窯	
3	甕	H	—	(6.5)	3.8	ABCDEG	普通	にぶい黄橙	80	大里の低地	
4	鉄鏃	現存長7.5cm　鏃身幅3.6cm　柄部幅0.8cm　柄部厚さ0.3cm　重量24.42g								鉄製	10-2

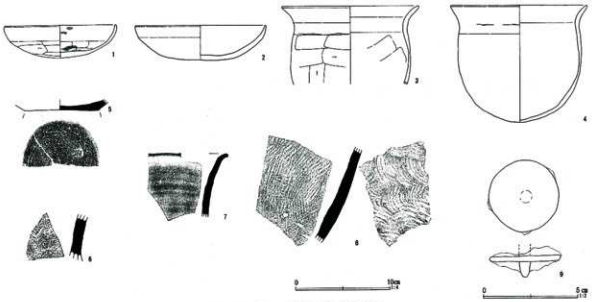
が出土した。

床面上の出土遺物は東壁のカマド前方部に集中してみられた。これらの状況から北壁カマドが使用、廃棄された後に東壁カマドが作られたものとかんがえられる。主軸方位は北壁カマドがN－21°—W、東壁カマドがN－71°—Eを測る。壁溝は全周していたものとおもわれる。貯蔵穴は検出されなかった。

出土遺物は須恵器坏、土師器甕の他、鉄鏃が貼床下から出土している。



第50図 第19号住居跡



第51図　第19号住居跡出土遺物

第19号住居跡出土遺物観察表（第51図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	坏	H	12.0	3.4	－	ABCEG	普通	橙	85	大里の低地 灯明皿か？	6-8
2	坏	H	(13.8)	(3.6)	－	ABCE	不良	にぶい黄橙	20	江南台地の細かいローム　カマド	
3	甕	H	(14.5)	(8.2)	－	ACEG	普通	明赤褐	30	江南台地の細かいローム	
4	甕	H	14.4	12.4	－	ABCE	不良	明赤褐	50	江南台地の細かいローム	9-1
5	坏	S	－	(0.6)	7.7	ACGH	良好	灰	破片	南比企窯　転用硯	
6	甕	S	－	－	－	ACG	良好	暗灰	破片	南比企窯	
7	甕	S	－	－	－	BDG	良好	灰白	破片	東金子窯	
8	甕	S	－	－	－	ACDH	良好	灰白	破片	南比企窯	
9	紡錘車	円盤部径3.8cm　芯部径0.5cm　円盤部厚さ0.3cm　重量16.17g								鉄製	10-3

第19号住居跡（第50・51図）

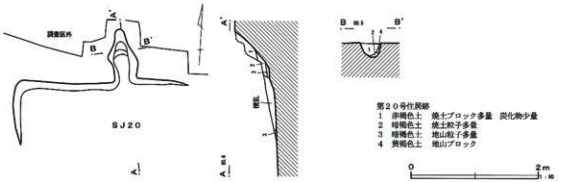
C－7グリッドに位置する。西区の斜面部に立地する。南側が土砂流出し、床面中央に試掘トレンチがかかる。

カマドは北壁中央からやや西よりにとりつき、煙道部がトンネル状にのこる。壁面と底面および天井部は被熱焼土化が著しい。袖部の先端には長方形の片岩が2個立ち上がり、両者の間にさらに長方形の片岩が橋状にかかる。カマドの焚口部分の補強材が、使用時そのままの状況で検出された。西側袖石（S1）は長さ38.0cm、幅19.3cm、厚さ4.2cmを測る。カマド東側袖石（S2）は長さ40.5cm、幅18.0cm、厚さ3.2cmを測る。橋状にかかる片岩（S4）は長さ68.0cm、幅14.5cm、厚さ4.8cmを測る。これらの片岩はいずれも被熱赤化している。片岩の後方は底面が浅くくぼんでいて、カマドの主体部を形成する。

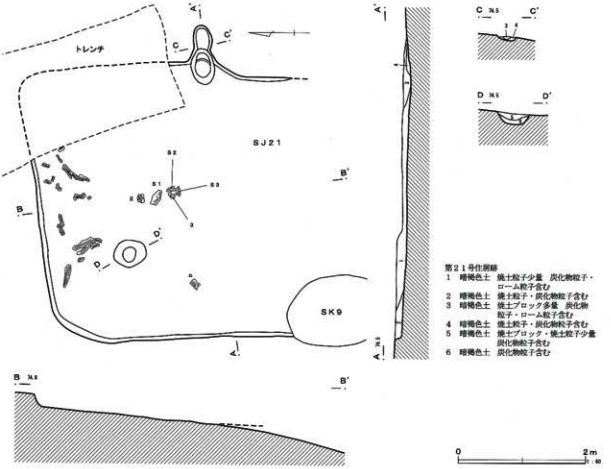
壁溝はカマド部分を除いて全周していたものとおもわれる。貯蔵穴は検出されなかった。

遺構の規模は、主軸長が現存で2.8m、東西幅4.7m、床面の深さ20cmを測る。主軸方位はN－27°－Wを測る。

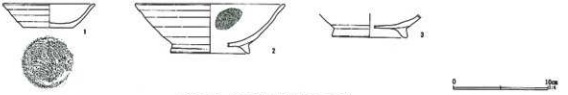
遺物は北半部の床面上から土師器坏、小型甕、須恵器坏、鉄製紡錘車などが出土した。



第52図　第20号住居跡



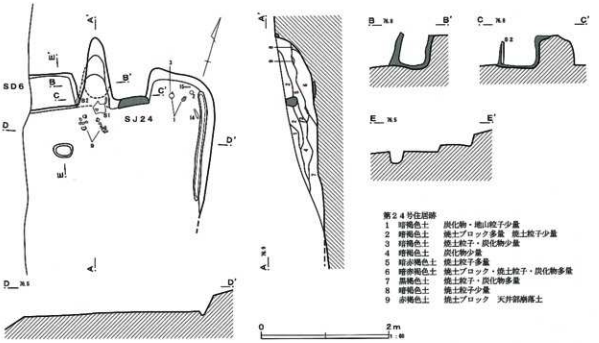
第53図　第21号住居跡



第54図　第21号住居跡出土遺物

第21号住居跡出土遺物観察表（第54図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	坏	HS	9.7	2.5	5.2	ACDEI	普通	橙	80	末野窯	7-1
2	高台付椀	HS	(15.8)	(5.2)	(8.2)	ACD	不良	橙	45	末野窯　内面黒色処理か？	7-2
3	高台付椀	HS	—	(2.5)	(8.0)	ACGI	不良	橙	50	江南台地の粗いローム	



第55図　第24号住居跡

第20号住居跡（第52図）

B－5グリッドに位置する。西区の斜面部に立地する。カマドと北壁の一部がのこる他、ほとんどが流出している。

カマドは北壁から短くのびる。底面と壁面が焼土化しているが顕著ではない。主体部は北壁から内側にあったものとおもわれるが、床面に撹乱をうけていて痕跡が認められなかった。カマドの主軸方位はN－12°－Wを測る。

出土遺物は小破片のみで、図示できるものはなかった。

第21号住居跡（第53・54図）

D－8・E－8グリッドに位置する。西区の斜面部中腹に立地する。北東隅部に試掘トレンチがかかり、南側は流出する。SK9と重複するが新旧は不明である。

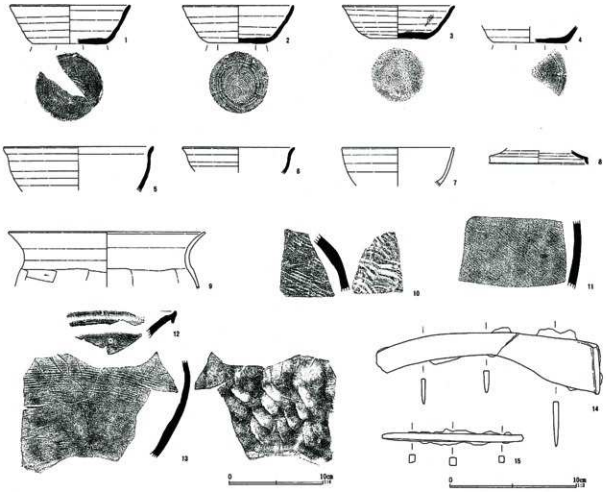
カマドは東壁にとりつく。煙道部が壁から短くのびて規模の小さい主体部を形成する。カマド周辺部にはみられないが、床面中央からややまとまって片岩が検出された（S1～S3）。いずれも被熱の痕跡は明確でなく、カマドの補強材として使用されたものかどうかは不明である。床面からは炭化材が多数検出された。貯蔵穴はなく、ピットが一ヶ所検出されたが、住居にともなうものかどうかは不明である。

遺構の規模は、主軸長4.1m、南北幅が現存で4.1m、床面の深さ17cmを測る。主軸方位はN－83°－Eを測る。

床面上から坏、高台付椀が出土した。

第24号住居跡（第55・56図）

D－6・D－7グリッドに位置する。西区の斜面部に立地する。西側をSD6・7に切られ、南側を土砂流出する。



第56図　第24号住居跡出土遺物

第24号住居跡出土遺物観察表（第56図）

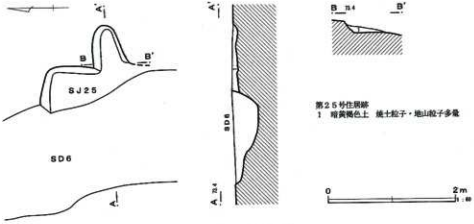
番号	器　種	種別	口径	器高	底径	胎　土	焼成	色　調	残存率	備　　考	写真図版
1	坏	S	12.8	4.1	7.7	ACH	良好	灰	80	南比企窯	7-3
2	坏	S	11.9	3.9	5.9	ACH	良好	ｵﾘｰﾌﾞ灰	100	南比企窯	7-4
3	坏	S	11.8	3.4	6.0	AEH	良好	ｵﾘｰﾌﾞ灰	100	南比企窯　灯明皿	7-5
4	坏	S	—	(1.7)	(7.7)	ACGEI	良好	灰白	25	南比企窯	
5	椀	S	(15.8)	(4.6)	—	ACH	良好	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰	20	南比企窯	
6	坏	S	(12.0)	(2.6)	—	GH	良好	灰白	破片	南比企窯	
7	坏	H S	(12.0)	(4.1)	—	ACGEH	普通	灰黄	20	末野窯	
8	蓋	S	(10.5)	(1.5)	—	ACH	良好	黄褐	20	南比企窯	
9	甕	H	21.0	(5.8)	—	ABC	普通	橙	50	大里の低地	
10	甕	S	—	—	—	CG	良好	灰	破片	末野窯	
11	甕	S	—	—	—	AEGH	良好	浅黄	破片	南比企窯	
12	甕	S	—	—	—	CDG	良好	暗赤褐	破片	南比企窯	
13	甕	S	—	—	—	AEH	良好	黒灰	破片	南比企窯	
14	鉄鎌	現存長17.8cm　幅4.9cm　厚さ0.4cm　重量88.64g								鉄製	10-4
15	鉄製品	長さ11.2cm　幅0.6cm　厚さ0.5cm　重量12.77g								用途不明	10-5

北壁にとりつくカマドは、西側の壁面に片岩による補強材（Ｓ２）がのこり、カマド前方部にも片岩が散在する（Ｓ１）。本来は片岩が壁面の両側に、補強材として対をなしていたものとおもわれる。焚口には焼土化したブリッジ部分がのこっていたが、天井部はすべて崩落していた。カマドの底面から壁面にかけては焼土化が著しい。

東側隅部とカマド西脇部にそれぞれ外側への張り出し部が設けられ、西側には床面に段差がみられる。カマド東脇部の壁面は被熱焼土化して検出された。東壁にそって壁溝が検出された。貯蔵穴は検出されなかった。

カマドの主軸方位はＮ－16°―Ｗ、床面の深さは30cmを測る。

遺物はカマド前方部と東隅の張り出し部にみられた。カマド前方部からは土師器甕が、張り出し部からは鉄鎌、用途不明鉄製品、須恵器坏が出土した。



第57図　第25号住居跡

第58図　第25号住居跡出土遺物

第25号住居跡出土遺物観察表（第58図）

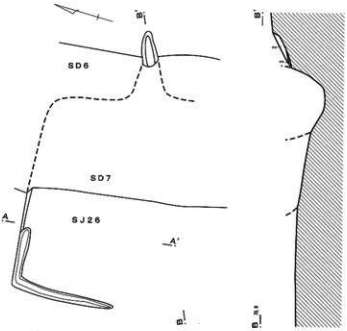
番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	坏	S	―	(1.0)	6.0	ACGH	良好	灰白	破片	南比企窯	
2	坏	S	―	(1.0)	5.4	ACH	良好	にぶい赤褐	破片	南比企窯　灯明Ⅲ	

第25号住居跡（第57・58図）

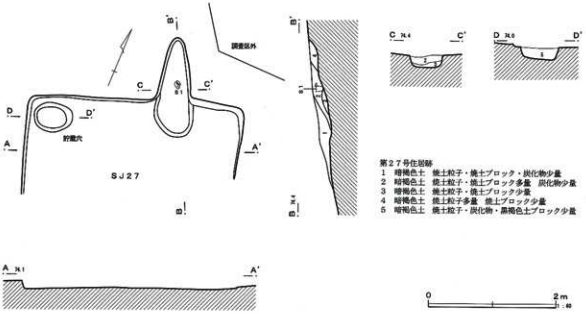
Ｅ－７グリッドに位置する。西区の斜面部に立地する。カマドとその周辺部がわずかにのこるだけで、大半はＳＤ６・７にこわされている。小型の住居跡だったものとおもわれる。

カマドは東壁からのびる。覆土内には多量の焼土が含まれるが、底面の被熱の痕跡は明瞭ではない。カマドの主軸方位はＮ－86°―Ｅを測る。

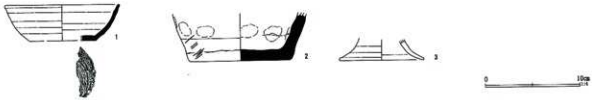
遺物は、わずかに須恵器の底部破片が出土した。



第59図　第26号住居跡



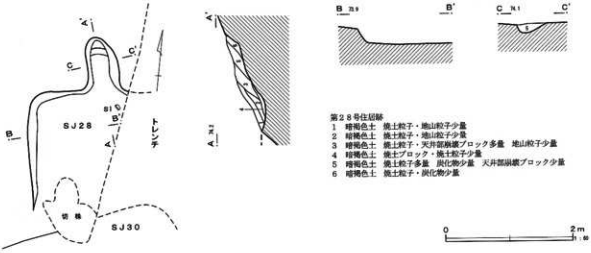
第60図　第27号住居跡



第61図　第27号住居跡出土遺物

第27号住居跡出土遺物観察表（第61図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	坏	S	(12.2)	(3.8)	(6.9)	ABCE	良好	灰白	破片	南比企窯	
2	甕	S	—	(5.0)	10.5	ACGH	良好	灰白	25	南比企窯	
3	台付甕	H	—	(2.0)	8.9	ABCE	普通	明赤褐	40	江南台地の細かいローム	



第62図　第28号住居跡

第26号住居跡（第59図）

D－6グリッドに位置する。西区の斜面部に立地する。SD6・7に大半をこわされるが、カマドの煙道部と北西隅部の壁溝がわずかにのこる。主軸方位はN－80°－Eを測る。

遺物は小破片のみで、図示できるものはない。

第27号住居跡（第60・61図）

D－10グリッドに位置する。西区の斜面部に立地する。南側半分が土砂流出のため、失われている。

カマドは北壁にとりつき、底面は浅くくぼむ。カマド内の中央から片岩が直立して出土した（S1）。支脚として使用されたものであろうか。カマドの主軸方位はN－18°－Wを測る。北西隅部から貯蔵穴が検出された。

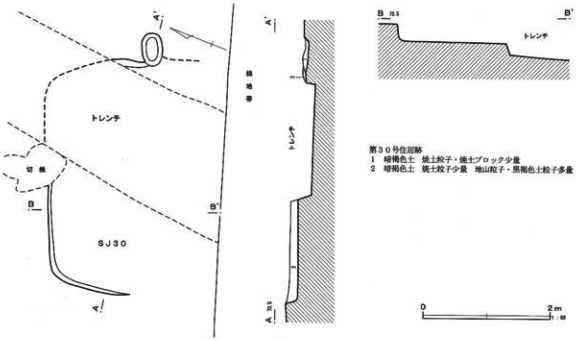
遺構の東西幅3.5m、床面の深さ11cmを測る。遺物は須恵器坏、甕、台付甕の破片が出土した。

第28号住居跡（第62図）

D－10グリッドに位置する。西区の斜面部に立地する。東側に試掘トレンチがかかり全容は不明だが、北壁にカマドがとりつく。カマド底面は緩やかな段差をもつ。カマド前方部に補強材とおもわれる片岩（S1）の出土をみた。

カマドの主軸方位はN－13°－W、床面の深さは11cmを測る。

図示できる遺物は出土しなかった。



第63図　第30号住居跡

第64図　第30号住居跡出土遺物

第30号住居跡出土遺物観察表（第64図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	坏	HS	(13.4)	(2.2)	(9.0)	ABCEG	不良	にぶい黄橙	破片	大里の低地	

第30号住居跡（第63・64図）

D−10・E−10グリッドに位置する。西区の斜面部に立地する。中央部に試掘トレンチがかかり、南側が土砂流出している。

カマドは東壁にとりつき、基底部のみがわずかにのこる。覆土には焼土が含まれるが、底面の被熱の痕跡は明瞭ではない。

カマドの主軸方位はN−70°—Eを測る。図示できる遺物は、坏１点のみである。

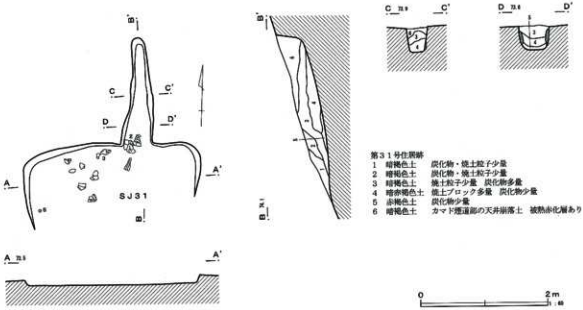
第31号住居跡（第65・66図）

E−８グリッドに位置する。西区の斜面部に立地するために、南側の大半が土砂流出している。東西幅は2.8ｍを測る小型の住居跡である。床面の深さは12cmを測る。

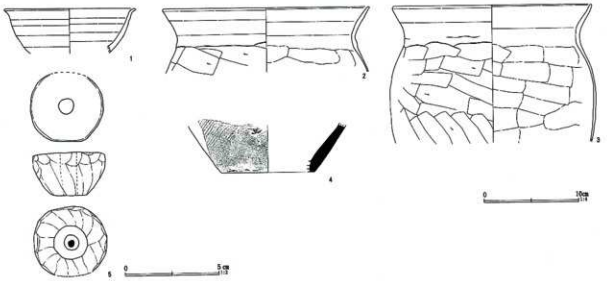
カマドは北壁から1.7ｍのびる。カマド壁面は被熱焼土化しており、覆土には天井部の崩落土が観察された。底面は平坦で、目立ったくぼみは認められなかった。片岩などの補強材は検出されなかった。主軸方位はN−4°—Wを測る。

カマド前方部には炭化材が検出された。壁溝はなく、貯蔵穴も検出されなかった。

出土遺物はカマド内から長胴甕が出土した他、灰釉椀、土師器甕、石製紡錘車が出土した。石製紡錘車の中心部には木製の芯が遺存する。



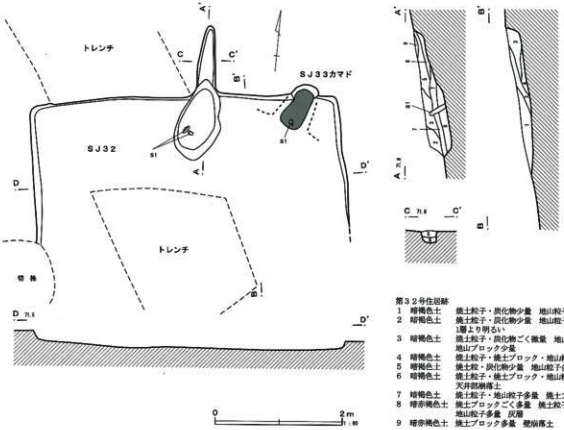
第65図　第31号住居跡



第66図　第31号住居跡出土遺物

第31号住居跡出土遺物観察表（第66図）

番号	器種	種別	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考	写真図版
1	椀	K	(14.0)	(4.7)	—	G	良好	灰白	破片	二川　K－90　ハケメリ（内）	
2	甕	H	22.0	(6.7)	—	ACDE	普通	にぶい黄	50	大里の低地	
3	甕	H	(21.0)	(14.0)	—	ABCD	普通	橙	20	大里の低地	
4	甕	S	—	(5.0)	(10.0)	AF	良好	灰	破片	南比企窯	
5	紡錘車	長さ3.9cm　幅2.3cm　厚さ1.8cm　重量136.277g								石製　軸残存	9-4



第67図　第32・33号住居跡

第32・33号住居跡（第67図）

F－8・F－9グリッドに位置する。西区の斜面部に立地する。ＳＪ32の北壁東側にＳＪ33のカマドが重複する。新旧は不明である。

ＳＪ32は、床面中央に試掘トレンチがかかり南壁が土砂流出する。北壁からカマドの煙道部がのびて、前方の浅いくぼみの位置にカマドの主体部がくるものとおもわれる。明確な袖部は検出されなかったものの、くぼみのなかから袖部の補強材に使用されたものとおもわれる片岩が、直立した状態で検出された。片岩は長さ17.4㎝、幅12.2㎝、厚さ1.6㎝で、両面が被熱していた。

壁溝はなく、貯蔵穴も検出されなかった。ＳＪ32は主軸方位がＮ－３°―Ｗ、東西幅4.9ｍ、床面の深さ21㎝を測る。

ＳＪ33は、わずかに被熱赤化したカマドの基底部のみがのこる。カマド内からは補強材とおもわれる片岩が１点検出された。片岩は長さ14.4㎝、幅7.8㎝、厚さ2.3㎝で、両面が被熱していた。

カマドの主軸方位はＮ－22°―Ｅを測る。遺物は小破片のみで、図示できるものはない。

第68図　第１号掘立柱建物跡

（２）　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第68図）

Ｃ－４・Ｃ－５グリッドに位置する。南側のピットは土砂流出のためにのこりが浅いが、北側のピットは深い掘りこみをのこしている。平面形態はややゆがんだ長方形となり、桁行５間、梁行２間の建物跡と推定される。ピットの形態は円形で、大きいもので径40cm、深さは最も深いものでＰ４の50cmを測る。出土遺物もなく、やや規格性が弱いが住居跡と重複しない位置にあることから、住居跡と何らかの関係があるものとおもわれ、奈良・平安時代の遺構と判断した。

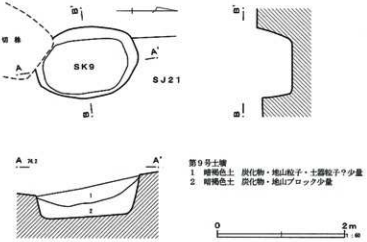
（３）　土壙

第９号土壙（第69・70図）

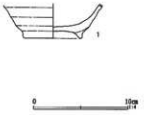
Ｅ－８グリッドに位置する。ＳＪ21と重複するが新旧は不明である。平面形は楕円形で、長軸1.6ｍ、短軸1.1ｍ、深さ60cmを測る。覆土内から多くの須恵器破片の出土をみたが、図示できるものは１点のみである。

（４）　遺構外出土遺物（第71図）

奈良・平安時代の遺物で、表採、グリッド出土、近世以降の溝跡から出土したものをここに一括した。須恵器坏、甕、蓋、長頸瓶などである。３は墨書が二ヶ所にあり、うち一ヶ所は「子」と読める。



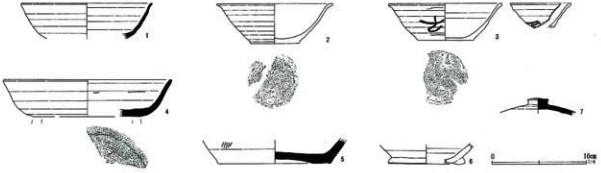
第69図 第9号土壙



第70図 第9号土壙出土遺物

第9号土壙出土遺物観察表（第70図）

番号	器 種	種別	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考	写真図版
1	高台付椀	HS	—	(3.5)	6.2	ACEF	不良	橙	30	末野窯	



第71図 遺構外出土遺物（奈良・平安時代）

グリット出土遺物観察表（第71図）

番号	器 種	種別	口径	器高	底径	胎 土	焼成	色 調	残存率	備 考	写真図版
1	坏	S	(14.0)	(3.8)	—	ACH	良好	灰	20	南比企窯 C5ｸﾞﾘｯﾄﾞP2出土	
2	坏	HS	(12.2)	(4.2)	(5.2)	ABE	不良	にぶい黄	25	南比企窯 C6ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土	
3	坏	HS	(12.0)	3.9	6.0	ABCH	普通	明黄褐	25	南比企窯 C6ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土 墨書	9-2
4	坏	S	(17.9)	(3.9)	(11.3)	ACEG	良好	灰	20	末野窯 表採	
5	甕	S	—	(2.5)	(12.0)	ABCD	良好	灰黄褐	70	南比企窯 SD6出土	
6	長頸瓶	K	—	(2.0)	(8.2)	ACG	普通	浅黄	20	東海地方 B4ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土	
7	蓋	S	—	(1.5)	2.2	ACH	良好	灰	25	南比企窯 A5ｸﾞﾘｯﾄﾞ出土	

第１号住居跡出土石材観察表（第22図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S１	10.0	7.5	1.5	0.24	緑泥片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	片面被熱
S２	10.1	8.0	1.0	0.11	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	片面被熱
S３	3.6	2.7	0.3	0.01	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	片面被熱
S４	10.0	8.5	4.3	0.52	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ袖部	

第６号住居跡出土石材観察表（第29図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S１	14.0	12.5	1.4	0.28	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	両面被熱
S２	13.2	8.3	0.9	0.1	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	両面？被熱
S３	8.0	6.8	0.8	0.60	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	
S４	29.8	11.0	2.5	2.22	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	一部両面被熱 片面に加工痕
S５	90.0	6.8	0.9	0.60	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	
S６	30.1	15.2	3.0	3.30	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	両面被熱
S７	28.0	15.3	2.5	2.21	絹雲母片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	両面？被熱

第10号住居跡出土石材観察表（第33図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S１	12.0	8.0	3.0	0.43	緑泥片岩	ｶﾏﾄﾞ	両面被熱 直立して出土

第12号住居跡出土石材観察表（第36図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S１	28.0	17.0	4.4	3.1	結晶片岩	床面中央	両面被熱

第17号住居跡出土石材観察表（第44図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S１	27.3	7.8	3.0	3.0	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ前方部	両面被熱 片面緑片に加工痕

第18号住居跡出土石材観察表（第47図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S１	—	—	—	—	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ袖（北側）	両面被熱
S２	—	—	—	—	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ袖（南側）	一部両面被熱
S３	23.0	7.8	3.6	1.03	結晶片岩	壁溝	両面被熱
S４	13.6	13.0	0.8	0.22	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ	片面被熱
S５	21.5	7.4	3.8	0.85	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ前方	片面被熱
S６	10.8	5.0	0.5	0.03	結晶片岩		

第19号住居跡出土石材観察表（第50図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S１	38.0	19.3	4.2	5.70	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ焚き口部	両面被熱
S２	40.5	18.0	3.2	4.50	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ焚き口部	両面被熱
S３	7.0	4.5	4.3	0.21	結晶片岩		
S４	68.0	14.5	4.8	7.00	結晶片岩	ｶﾏﾄﾞ焚き口部	片面被熱 片側緑片部に加工痕

第21号住居跡出土石材観察表（第53図）

図版内No.	長さ	幅	厚さ	重量(kg)	石　質	出土位置	備　　考
S１	24.7	6.5	3.1	2.12	結晶片岩	床面中央	
S２	13.8	9.0	5.3	0.69	結晶片岩	床面中央	
S３	13.7	9.5	7.0	0.83	結晶片岩	床面中央	